

高潔勇者が壊れきるまで
俺はスマホをタップする。

目次

序章	「行ってこいよ、ヒーロー！」
一章	【どうやら、俺は『勇者』になったらしい】
二章	【ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい】
三章	「お前のそういうところが、大嫌いだ」
四章	「遅いよ」
五章	「似たもの同士だね、俺たち」
終章	スマホは引き出しの奥に

伊邪那岐命は仰せになった。

「我が愛しの妻よ、あなたと私が作っている国は、未だ形を成し得ていない。さあ、帰っておいで」

しかるに、伊邪那美命はお答えになった。

「それは残念にございます。あなたが早くいらしてくださいださらなかったものだから、わたくしは黄泉の国の食物を口にしてしまったのですよ」

古事記 上つ巻―伊邪那岐命と伊邪那美命―（私訳）

序章

「行ってこいよ、
ヒーロー！」

—宏正／二〇〇九年　八月八日—

ぎらつく日差しに目が眩む。熱がちりちり肌を焼く。街路樹に集った蝉は高らかに命を歌い、透き通った青空には、白い絵の具を含ませたスポンジをぽんぽん押しつけたような雲が浮かんでいる。

小学四年生の夏休み。世界の全てがきらきらと輝いていた、あの頃。

「あれ!? 魔法楽士選べないんだけど!？」

リビングに置かれた真新しい薄型テレビの前に、コントローラーの方向ボタンを連打しながら、春山風は素っ頓狂な声を上げた。

「待って、調べてみる……あ、吟遊詩人のレベルが一〇ないとだめみたいだ」

「マジカー! あと一足んないー!」

操作担当の風を、分厚い攻略本を捲りながらサポートする。切れ長の目元涼やかな彼の名は、伊波宏正。

風は嘆くが、宏正は満更でもなかった。ポリゴンで描かれたキャラクターを通じて、剣と魔法の世界を風と冒険できるならば、後戻りだって楽しいからだ。

彼らがプレイしているゲームは、RPGの元祖たるシリーズの最新作。打倒魔王を掲げて仲間と旅立つ勇者の物語は、王道にして男子の嗜みだった。

勇者ナギ御一行が辿り着いたのは、祭祀の間。転職を司るこの場には、騎士、魔導師、鍛冶職人など、様々な職業に扮したキャラクターが整列している。

「なあなあ、この中で転職するとしたらさ、どれになりたい？ 俺勇者ー！」

フロアリングに置いたトレイから取った冷えた麦茶をぐくぐくぶはあと飲み干すや、凧は捲し立てる。

「ヒロはどれにすんの？」

残った氷をがりがり頬張りながら問いかけられて、宏正は迷わず一点を指差す。

「僕は……アーマーナイトがいいな」

「なんで？ 足遅いじゃん」

「みんなを守るからだよ。てっぺきを使えば、ダメージ受けないしね」

「そっか！ じゃあさ、俺のことも守ってくれよ！ お前が壁になってる間にライズ系盛りまくって、フルバフテラパニッシュメントー！ どかーん!! って」

「ナギ、うっさい!!」

転職談義は中断せざるをえなかった。リビングを強襲した少女は、魔王より恐るべき存在だからだ。

「今日は自習室休みだから静かに遊べって言ったでしょ!? 今度騒いだら、あなたの花見だいふく没収だからね!」

「ごめんってばー! せめて半分!」

中学二年の姉が相手では、小学四年の弟に到底勝ち目はない。両手を合わせて慈悲を乞う風の横で、宏正は神妙に頭を下げる。

「ごめんなさい、うるさくして」

「ヒロ君が謝ることないよ。ナギだけだもん、こっちまで声聞こえたの」

じろりと睨まれるも、てへ、と笑って風は誤魔化す。ついこちらまで笑ってしまいかねない人懐こい笑みは、風の長所にして武器だった。

「濡ー、風ー! ホットケーキ焼けたから、手伝ってー」

「はーい!」

キッチンからの緊急召集を受け、一斉に振り返った姉弟の返事が重なる。

「ナギ、フォークとナイフ出して。あたしお皿やるから」

「おっけー！」

先の衝突などなかったかのように連携する二人とは別に、宏正も動く。

「テーブルを拭くの、この布巾でいいですか？」

「いいのよ、ヒロ君はお客さんなんだから。座ってて」

「僕もお手伝いします。いつもごちそうになってますから」

「そう？　じゃあお願いしちゃうかな」

宏正の申し出に、風の母は笑う。

「ヒロ、もうフォークとか置いていい？」

「うん、お願い！」

風と一緒に手伝えるのが嬉しくて、宏正は一生懸命ダイニングテーブルに布巾を走らせた。

ぴかぴかに磨き上げたテーブルに、お待ちかねのホットケーキがやってくる。

狐色に香ばしく焼けたホットケーキの上にバターを乗せて、黄金色のシロップをとろとろかければ、

「うんまあー!!　母さんのホットケーキ最高ー!　銀河一！」

「んー！ 点Pに振り回された頭にガツンと効くうー！」

フォークを口に運んで相好を崩す様子は、瓜二つだった。姉弟だなあと思うと微笑ましくもあるし、少しばかり羨ましくもある。

「ヒロも食えよ！」

「そうね、温かいうちにどうぞ」

「ありがとうございます、いただきます」

風達に促されて、宏正も一口大に切り分けた幸せをはくりと含む。

「すごくおいしいです……！」

焼きたてのホットケーキ、家族の笑顔、いつでも一緒の親友。春山家のテーブルには、どこにでもある喜びが溢れていた。宏正にとって、それはとても尊いもの思えてならなかった。

『おれ、はるやまなぎ！ よろしく！』

同じ保育園出身の友達が誰もいない入学式。ぴかぴかの礼服に包まれた身を固くしていた宏正に、風は二重の垂れ目をきらきら輝かせながら握手を求めてきた。

あの手の温かさを、煌めく笑顔を、守りたかった。

——大事な、大事な、友達だから。

―風／二〇二五年 七月十日―

住めば都ならぬ、呑めば都。

カウンター席五席、テーブル席四席。昭和の香り漂う、壁に貼られた手書きのメニュー。住宅街の一角に佇む昔ながらの居酒屋が、彼らにとっての都だった。

「そんじゃ、お疲れー！」

「お疲れ様」

麦香る黄金色の炭酸水に、白い泡が立ち上る。きんきんに冷えたノンアルコールビール入りのジョッキが二つ、かつんと音を鳴らす。

アルコールが入っていいようにまいが、風にとっては瑣末なことだ。企業努力の甲斐あって、最近のノンアルの風味はビールにだいぶ近づいている、それに。

熱々の焼き鳥が乗ったテーブルを挟んだ向こうに、宏正がいる。緩んだ口元に運んだジョッキを傾けて、風は酒精皆無の酩酊感を味わう。

背筋を正しながら、宏正もノンアルビールを一口飲む。子供の頃から礼儀正しかったが、中学から始めた剣道と現職の影響か、所作の一つ一つが洗練されていた。など

と見惚れてしまうのは、幼馴染の欲目なのだろう。

「いつも悪いな、わざわざこっちまで来てくれて」

「いんだよ、ここのねぎま絶品だもん。なー、大将」

成長してなお健在な人懐こい笑みを浮かべて、凧はカウンターの奥へ呼びかける。

強面の大将は、厨房から無言で親指を立てた。

白状すれば、この店は宏正が住んでいる官舎に程近い。多忙を極める宏正に、無駄な負担はかけたくなかった。その上、実際ねぎまも旨い。肉汁を閉じ込めた鶏も肉、辛みと甘みを含む葱、炭火で香ばしく焼かれたそれらに甘じょっぱい秘伝のタレが絡めば、酒も会話も進むというものだ。

一旦ジョッキをテーブルへ置くと、宏正は口元を綻ばせた。

「ありがとう、凧。この前の講話、上手くいったよ」

「あれだろ、中学生向けの防犯講座。良かったじゃん！」

「俺が作った原稿を新任に聞いてもらったら、三十秒で寝落ちされたからな……」

宏正の端正な顔に、何とも言い難い苦渋が滲む。秋島警察署、地域課所属、伊波宏正巡査部長二十六歳。町の平和を守る交番のお巡りさんにも、人知らぬ苦労があるも

のだ。

「風のアドバースのおかげだよ。話し方だけじゃなくて、どうすれば興味深く聞いてくれるか、身近な問題として考えてもらえるかまで考えてくれたからな。流石、営業部のエース」

「ま、お客様目線の提案は営業の基本スキルだからさ。天才営業マン春山風を、今後ともどうぞご贔屓に」

殊更に芝居がかった言い回しは、照れ隠しだ。天才は言い過ぎだが、天職という自負はある。大手食品メーカーの営業部として、自社と小売、そしてエンドユーザーの利益を追求するこの仕事には、風なりのやり甲斐を感じていた。

「お客様目線、か」

宏正は柔らかな笑みを溢す。

「昔から、風は人の良さを見つけて褒めるのが上手いよな。俺は仕事となると、どうも堅苦しくなりがちだから、見習いたいよ」

「何言ってるんだよ、十分いいお巡りさんしてるだろ。防犯講座だって、真剣に生徒達のことを考えてたから、伝わったんだよ。アルファ波も出なかったみたいだし」

「アルファ波云々が謳い文句の押し売りは、詐欺の可能性があるから……少しでもおかしいと思ったら、迷わず通報してくれ……!」

よほど対処に追われているのか、宏正の眉間に深い皺が寄った。警察官も大変だなあ、と、凧はつい苦笑してしまう。

しかし、宏正の顔を覆う翳りは晴れない。

「どした？」

宏正との会話もいい酒の肴だが、外回りの合間に搔っ込んだ立ち食い蕎麦はとづくに消化されている。空きっ腹に促され、凧は焼き鳥に手をつけながら話を聞くことにする。甘辛ダレがスーツにシミを作る前に串から引き抜き、食らいつく。やっぱり、ここのは旨い。

「詐欺に限らないんだが、犯罪に巻き込まれた被害者は、自分を責めてしまうことが多いんだ」

二本目に伸ばしかけた凧の手が、止まった。

「『もし深い傷を負ってしまったも、そこで人生は終わらない。周りの大人や先生、警察が必ず力になる。だから一人で抱え込まずに頼ってほしい。私達は味方だ』」。

……生徒達にもそう話したんだが……伝えられたかな」

風が想像するより遥かに多い被害者達と、宏正は正面から向き合ってきたのだろう。そして彼らが背負っている重荷を平気で担ぐ。そういう男だ、宏正は。

変わらないよな。何とも言えないほろ苦さを噛みしめながら、親友が背負いすぎた重荷の一つをひょいと貰い受ける。

「大丈夫、伝わってるよ。こんなかつこいいお巡りさんが本気で心配してくれてるんだ、届かないわけないって。それに、今年も募集パンフレットに選ばれたんだろ？ よっ、能碁交番の看板息子！」

「あれはたまたま俺だけデスクワークしてたからだよ」

はは、と宏正は照れくさそうに笑う。実年齢以上の落ち着きと貫禄を醸す凛々しい顔つきが、家族や友人という時は僅かに幼さを帯びる。その笑顔が、大好きだった。あと、パンフレットはPDFをダウンロードして高解像度で光沢紙に印刷してファイリングして、家宝にした。

宏正は真面目な男だ。警察官になってからというもの、非番でもいつでも招集に応じられるようにと、ほとんど酒を飲んでいない。風が宏正の酔っている姿を見たのは、

大学時代くらいだ。涼やかな目元がほんのり赤く染まった色白の横顔は、綻んだばかりの桜のようだった。

——今じゃ、そこそこゴリラだけど。服着てると目立たないけど、警察学校の卒業祝いで呑んだ時なんか腹筋ガチガチで、すげえってなったけど。

テーブルに置いていたスマホが鳴る。通知音から察するに、電話だ。切れ長の目が、一転して鋭さを増す。

——どうか招集じゃありませんように。お願いします、一ヶ月ぶりなんです。今日だけは定時撤退を死守するために苦手な報告書作成も頑張ったし、弊社鉄板商品、冷凍カット野菜十ケースもがつり運んで納品してきました、だから。

「はい、能碁交番、伊波です」

終わった。きゅうううと喉を震わせる悲痛な呻きを押し留める。遅れて、宏正も頭痛を我慢しているような顔つきになる。

「……了解、一旦署に戻ります。……今日もすまない、風」

「気にすんなよ、大事件じゃ仕方ないって」

「いや……通報者ご本人はともかく、一般的に大事件かと言われると、その……」

「あー……」

通話を切ったスマホを握りしめた宏正は、齒切れ悪く口籠もる。

察するに、酔っ払いの相手か、逃げたペット探しか、それとも巨大な虫退治とかか。何となく見当はつくが、口にはしない。

守秘義務は、社会人にとって鉄の掟だ。宏正を困らせないためにも、余計な詮索はしたくなかった。

「これで頼む……!」

「いつも悪いな」

宏正が財布から急ぎ出した一万円札を、受け取る。ねぎま一本百五十円の相場にしては割高すぎるが、変に遠慮すれば出勤の邪魔になる。だから、風は黙って受け取ることにしている。その代わり、秘密裏に用意した厚手の封筒、通称『宏正バンク』へ全額プールして、次回の奢りに備えているのだ。問題は、ここ最近は残高が減る気配が一向にないことだが。

がたんとかかいの椅子が鳴る。清潔感のあるファストファッションを着こなす長身が、席を立つ。ついつい後を追ってしまった目と目が重なった。

切れ長の目が、微かに揺らいだ。噛みしめたように見えた口元が、笑みを湛えた。

「今週末は非番なんだ。その時に埋め合わせさせてくれないか」

「いいの!？」

思わず、声が跳ね上がる。もしも風が犬だったら、ぶんぶん尻尾を振っているところだ。

「そしたらさ、何だっけ、宏正がこの前言ってた日本刀の展覧会！ あれどうよ」

「構わないけど、風は興味ないだろ」

「そりゃ詳しくないけど、かっこいいじゃん、日本刀って！ わかんないことは教えてくれよ」

よく似た二振りを並べられても、恐らく風にとっては難易度の高い間違え探しにしかないだろう。だが、その違いや特徴、美点を小声で解説してくれる宏正の横顔を眺めるひときは、きつと最高だ。

そんな下心には気づかなかったのだろう、宏正は優しく頷くと、

「わかった。また連絡するよ、風」

「おう！ 行ってこいよ、ヒーロー」

にかつと笑って、凧は右手をこめかみに当てる。この町を守る親友へ、最大の敬意を込めて。

宏正も微笑んで、しかし指先はぴしりと揃えて答礼する。パンフレットの写真とも違うこの姿を、凧は親友の特権として見つめ返した。

「いつも残して済みません」

「あのなあ、お巡りさん相手に何年商売してると思ってんだ。いいから気をつけて行つてこいよ」

「はい！　ありがとうございます」

会釈の後に上げた眼差しは、事件現場のみを見据えていた。がらりと開けた引き戸の向こうに消えていく背中を、凧は黙って見送った。

「っは……」

引き戸が完全に閉まってしまうと、造花の向日葵めいた笑顔がしおしおと萎れていく。泡が減ったノンアルビールを一息に飲み干し、凧はへの字に曲げた口で矢継ぎ早に注文を厨房へ投げかける。

「大将、生ちようだい！　ねぎま五本と、つくねとぼんじりとハツとレバーとなんこ

つ、一本ずつ追加でお願いしまあす！」

「出たな、風ちゃんの失恋フルコース」

「そうだよお〜!? だからねぎま一本おまけして？」

「嫌だよ、一番原価率高いんだから」

「っすよね〜」

わざと無茶振りをして、風はわははと笑う。毎度の茶番に程々の距離感で付き合ってくれる店主達も、この店を選ぶ理由の一つだった。

「はい、生どうぞ」

「どもっす……」

早速新たなジョッキを運んでくれたのは、女将だった。彼女は厨房で串を炭火にかけ始めた夫をちらと見やると、声を顰めて、

「これ、奢りだって」

「大将お〜！」

目を輝かせて最大級の感謝を飛ばせば、大将は明後日の方向へ目をやって空惚けた。今でこそ気安いやり取りを交わしているが、通い始めたばかりの頃はだいぶ胡乱な

目つきを向けられていた。それはそうだろう。ただの友人同士で片付けるには、風が宏正へ向ける空気は、どうにも湿度が高すぎる。

それでも大将の方から冗談を言うほど大っぴらに振る舞えるようになったのは、日々真摯に地域をパトロールする宏正。姉に鍛えられたおかげで弟力を極めた風。何より、数年前に流行った男性同士の恋愛ドラマに女将さんが夢中になっていたという土台があったからだ。ありがとう多様性。

「毎回そんなに落ち込むくらいなら、いつそ告白しちゃえばいいのに」

苦笑しつつ、女将さんが宏正の飲みかけのジョッキを手取る。ついその行方を目で追ってしまうが、

「あはは、無理無理」

あっけらかんといなし、風は目を伏せる。

「あいつ、一人っ子だし」

宏正の両親とは、家族ぐるみの付き合いだ。教師の父と看護師の母、人を導き手を差し伸べることの尊さを宏正に伝えた彼らは、立派で優しい。なのに男である自分がしゃしゃり出た挙句、両親、そして宏正自身から、家族という形の幸せを奪う。そん

な真似だけは、絶対にしなくなかった。

重いジョッキを、ぐいと煽る。流し込んだホップの苦味とアルコールが、胸の内を灼いていく。

「そもそもの話、そういう対象には見られてないっすよ。あいつにとって、俺は明るくてお喋りでイケメンと一緒に遊ぶと楽しくて自慢の大大大親友！ ってだけ」
「あらやだ思ってたより自己肯定感高くておばちゃんびっくり」

——そう。ただの、親友。それだけ。それで十分。

― 風／二〇二五年 七月十二日 ―

土曜日の昼前。博物館最寄りのターミナル駅、改札口近く。日本刀展の大きな広告が貼られた円柱に、風は身を寄せていた。

待ち合わせ時間は十一時。現在の時刻は、十一時十五分。風が到着したのは、十時三十分。十分前行動を厳守する宏正を待たせなくなかったし、一秒でも多く過ごしたかったからだ。

「待った？」 「ううん、今来たところ」などと、同じように柱に屯していた人々は、それぞれの待ち人達と共に週末の街へ繰り出していく。風も改札から人が溢れ出るたびに背伸びまでして目を凝らしているのだが、人より頭一つ抜けた長身を、どうしても見つけられずにいた。

スマホを見る。薄手のベージュのサマーニットが揺れた。『着いた！ 改札出て正面の柱にいる👉』と十一時に送ったメッセージには、未だに既読がついていない。

約束の時間に遅れる場合、律儀な宏正なら必ず一報を入れていた。万が一招集されてしまったとしても、全くスマホを見られないとは思えない。

——寝坊してんのかな。だとしたらモーニングコール……いや、ここは寝かせておいた方がいいな。

日頃の勤務で溜めに溜めた疲労が、たまの休みに爆発する。ありえない話ではない、
凧とて、新卒の頃の休日はベッドから出られなかったのだから。

——ま、気長に待つか。特に予約してるわけじゃないし。

日本刀展のチケットは、宏正と合流してから購入する。昼食と夕食の店もいくつか
ピックアップしておいた候補の中から宏正に選んでもらうつもりだった。

宏正バンクの出番が遂に来た。例の封筒を入れた革のショルダーバッグを、手で押
さえる。宏正は魚が好きだから、刺身が旨い店を探しておいた。カジュアルなイタリ
アンレストランなんかも、たまにはいいかもしれない。

などとのんびり構えながら、凧は雑踏に佇む。来てくれるならそれでよし、来られ
ないならリスケするまでだ。

連絡が取れないのは、いつものことだ。警察学校時代なんか、電話すらともにで
きなかったんだし。離れていても繋がっているから大丈夫。などと、自分自身に言い
聞かせる。

相変わらず既読がつかないメッセージアプリに目を通してから、風はSNSを立ち上げる。トレンドに目を通しかけたその時、

「お客様にお知らせいたします」

駅構内に、駅員からのアナウンスが響き渡った。自ずとスマホから顔を上げる。

「加具地線、矢野駅にて車内での負傷者発生。報が入りました」

風は目を見開いた。宏正の最寄駅からここへ来るには、確か加具地線を使うはずだ。「安全確認のため、加具地線は全線で運転を見合わせております。運転再開の見込みは、現在立っておりません。」

お急ぎのところ大変ご迷惑をおかけいたしますが、他社線への振替輸送をご利用ください。繰り返します……」

だからか、と風は納得する。恐らく、宏正は運転停止の煽りをくらってしまったのだろう、でも。

——だったら、なんで既読つかないんだ。

すっかり充電を忘れて、バッテリーが切れた。きっと、そうだ。無理に自分を納得させつつ、風はスマホに目を戻す。先まで開いていたSNSアプリのタイムラインを、

焦燥が滲む指先でスワイプすると。

動画が、再生された。手ブレに揺れる電車の中で、怯えた乗客が逃げ惑っている。人の群れが流れきった後、一人カメラに背を向けたその人は、

「……あ」

声が、漏れた。ミュートで声は聞こえない、顔も見えない。けど、だけど、

「宏正……!?!」

声が震える。違う、宏正は別の電車に乗っているんだ、この人じゃないと叫びたかった。でも、わかってしまう。二十年来、ずっと隣で見てきた直感が言っている。あの背丈、あの服装、あの佇まいは、宏正だ。宏正本人だった。

風の周りから、音が消えた。人々のざわめきも、行き交う靴音も、繰り返されるアナウンスも、この場の全てがミュートされた。

宏正の奥に、男が一人いる。短い刃物のようなものを握っている。二人はしばし対峙していたが、不意に男は踵を返す。宏正から逃げようとするように。

宏正は、男を追った。迷いなく、駆け出した。思わず画面に触れた指先は、ガラスフィルムに阻まれて届かない。

隣の車両へ逃げ込む寸前、宏正は男を取り押さえた。電車の床に、二人もつれるように倒れ込む。

男は体を捻って仰向けになるや、右手を振り上げた。何度も、何度も何度も何度も、何度も振り上げた。

鮮やかな血溜まりが出来ていく。ライトブルーのポロシャツに、いくつもの赤い染みが広がっていく。

宏正は、動かなかった。決して、動かなかった。次の駅に到着したドアが開き、待機していた鉄道警察隊が踏み込むまで、身を挺して人々を守り続けた。



『次のニュースです。本日午前十時すぎ、加具地線の車内で、男が刃物で乗客を切りつける事件がありました。この事件で、乗客の男性一人が胸を刺されるなどして病院に搬送されましたが、その後、死亡が確認されました。』

亡くなったのは、秋島警察署の巡査部長、伊波宏正さん（26）です。警察により

――』
ますと、伊波さんは当時非番でしたが、刃物を持って暴れる男を取り押さえる際に

一章

【どうやら、俺は『勇者』になったらしい】

― 風／二〇二五年 九月二十五日 ―

入館証を、カードリーダーに翳す。ぴつと電子音が鳴れば、もう腑抜けた面ではない。
られない。

――しっかりしろ、俺。

ばん、と頬を軽く叩いて、風は気合を入れる。入れたところで、穴の空いた風船よろしく抜けていくのだが。

「おい、春山」

営業部フロアに入る寸前、圧のある声に呼び止められた。溜息を呼吸に隠して、振り返る。

「……何、鈴木くん」

平らな声を返した相手は、同期の鈴木湊。二歳上でマーケティング本部販促企画部主任、あと七三眼鏡。

「何、じゃない。足元を見てしろ」

「相変わらずいい靴履いてんね。給料何ヶ月分？」

「そこまでじゃない、精々半月分くら……違う！ お前のだ！」

荒げた声に押されるように見下ろせば、給料十分の一ほどの値段の革靴は、見事に泥まみれになっていた。昨日は雨が降っていたような気がするから、どこかで水溜りを踏み抜いたのだろう。

「あー……後でハンカチで拭く……あれ、……ない」

「お前って奴は……！」

左右のポケットに手を突っ込む風、湊はぎりりと歯噛みすると、

「靴どころか、会社の顔にまで泥を塗る気か？ いいから早く拭いてこい」

苛立っている様子で、ハンカチを突き出してきた。上手いこと言ったなこいつ、と思うものの、口が重くて動かない。

「ごめん……後で新品返す……」

「要らん！ ……捨てるなり何なり、勝手にしろ」

「……ごめん……」

力ない謝罪を重ねて、風は俯く。確かに、足元は酷い有様だった。チェーンの靴専門店ですれを狙って買った革靴はもちろん、スラックスにまで飛沫が散っていた。

はあ、と小さく息をついて、風はふらりと踵を返した。

眉間に皺を刻みながらこちらを見据える鈴木の顔など、見えるはずもなかった。

ぎゅっと絞ったハンカチから落ちた水が、トイレの洗面台に飛び散った。身を屈め、濡らした布地で革靴を擦る。こちらにも有名なブランドのロゴが刺繍されている上、きつちりアイロンがかかっている。よほど主任手当が手厚いらしい。

何度か繰り返して、やっと汚れが目立たなくなった。鈴木は返さなくていいとは言ったが、そういうわけにはいかない。後でネットで商品名を調べて、新品を返そうと思う。一万円とかしなきゃいいけど。

最後にもう一度ハンカチを洗うべく、洗面台の前に立つ。鏡に映る顔はあまりにも空っぽすぎて、これは酷いなど我ながら笑ってしまう。向かい合わせの自分が、歪んだ笑みを浮かべる。

宏正が死んで、二ヶ月。あれからずっと、同じ日を繰り返している。

葬式で会った宏正は、棺の中でよく寝ていた。相当疲れてるんだろうな、仕事頑張ってたもんな。

『宏正バンク』は全額封筒に入れて、宏正の両親へ手渡した。宏正が最も尊敬し、愛した人達に使ってほしかったからだ。泣き崩れた両親が凧の手を包むように握った、その手の温度と感触だけはよく覚えている。

おい、起きろって。なあ。約束したじゃん、一緒に日本刀展行こうって。都合悪かったら別の日でもいいからさ。いい店も探したんだ、好きだろ、刺身。だから、——何言ってるんだよ、お前が殺したくせに。

「……あ」

また、意識が飛んでいた。

左手首のスマートウォッチに目をやる。八時五十五分、始業時間五分钟前。慌ててハンカチを絞って、ついでに髪を整えて、今度こそフロアへ向かう。

「おはようございます！」

口角を上げて上の歯を見せて、目元を緩めて、凧は元気いっぱい挨拶する。大丈夫、今日も一日乗りきれ、俺は天才営業マン、春山凧。



仕事と向き合っている間だけは、正気でいられた。いや、正気を演じていられたと言った方が正しいかもしれない。どちらにせよ、退勤して会社を出た途端、世界はぐらりと揺らいでしまう。

帰路の電車では、多くの乗客が各々のスマホを眺めていた。かつては風もその一人だったが、今はスマホをジャケットの内ポケットにしまうことにしている。

警察官が犯人から乗客を庇って、電車内で刺殺された。センセーショナルな事件は、大々的に報道された。テレビはもちろん、インターネットをも賑わせる格好の議題となった。

例のパンフレットも掘り起こされて、バズった。好意的なコメントがつくたびに、家宝がビリビリに破られていく気がした。

犯人の動機や境遇などもあれこれ取り沙汰されていたが、どうでもいい。

宏正を返せ。それ以外に、言うことなどない。

宏正とも繋がっていた大規模SNSでは、勇敢な警察官の死を悼む声が大半を占め

ていた。だが、独りベッドに寝転がりながらスマホをスワイプしていると、『ナイフ一本制圧できなかったクソ雑魚』『国家権力の犬一匹、駆除完了』『不謹慎だけど激メロ』などという投稿も目に飛び込んできた。

はあ、はあ、と荒ぶった息が、どこからか聞こえてきた。肩が激しく上下している。さっきまで手にしていたスマホがない。虚ろな目つきで辺りを見回すと、部屋の隅にひび割れたスマホが転がっていた。

後日、修理から戻ってきたスマホを立ち上げると、真っ先にとあるアプリのアイコンを長押しした。何度かタップすると、ホームボタンに並んだアイコンが一つ減った。有象無象の言葉が渦巻き溢れるSNSは、風のスマホから消え失せた。



暗闇へ、手を伸ばす。壁を探り、馴染んだ手触りのスイッチを見つけ出して、かち、と押す。昼白色の光が、一LDKの部屋を照らし出す。

通路を塞ぐゴミ袋を、足で蹴ってどかす。生ゴミこそ入っていないが、邪魔だ。

明日こそ、出さないと。昨夜も誓った決意を今夜も踏み躪り、風はビジネスバッグを無造作にベッドへ放り投げる。次いで、スマホも。

ジャケットだけは社会人の性で、丁寧にハンガーへかけてクローゼットへしまい込む。次いでネクタイを緩めかけたその時、無音の部屋に振動音が響いた。

出所は、ベッドの上。鉛の塊さながらに重いスマホを持ち上げると、メッセージアプリの通知が表示されていた。姉からだ。

『今、話せる？』

小さく溜息をついた。いいよと返事するのも億劫で、直接電話をかけてしまう。

「……………もしもし」

『あ、風？ 今どこ？』

「家だよ。さっき帰ってきたところ」

『そう。…………元氣？ ちゃんとご飯食べてる？』

「ん…………まあ、それなりに」

曖昧に誤魔化す。ゴミ袋の中身は、断じて言わない。

『お父さん言ってたけど、あんた、顔色最悪だったらしいじゃない』

先日行われた、宏正の四十九日の法要で会った時の話だろう。セレモニーホールに着いた風を見た両親の顔が見る間に曇ったのを思い出して、奥歯が軋む。

『お母さんも心配してるよ。そっち行けなくてごめん、……って』

「大丈夫だって。こう見えて、俺もう二十六歳児なんだよ？　四歳児と〇歳児の方が優先に決まってるじゃん」

母は、育休が明けて間もない姉のヘルプに回っている。この上、いい歳をした風の世話までさせては、親不孝極まりない。

姉の返事はなかった。僅かな間、部屋に戻った静寂に風は逃げ込もうとした、が。

『……あんた、ヒロ君のこと、好きだったもんね』

「まあね、親友だし」

『ヒロ君がうちに来た時が一番うるさかったんだよ、ナギは』

さらりと受け流して笑みを作った口角が、引き攣った。

どこまで知っているのだろう。どこまで話していいのだろう。口元が震える。ずっと堰き止めていた思いが濁流と化して溢れそうになる。

スマホを持つ手を、握りしめる。ごくりと生唾を飲んで、風は強張った口を開き、

「……姉ちゃ」

ほぎゃあ、ほぎゃあと、赤子の泣き声が電話口から聞こえた。

『ごめん、柚月が起きちゃった。……自分のことも大事にしないよ』

「……ありがと。姉ちゃんもワーママ稼業、お疲れ様。またあそのフルーツタルト献上しに行くよ。颯太はショートケーキで隆史さんはモンブラン、柚月ちゃんは服が
いいかな？　なんか可愛いやつ」

『……ん、完璧。褒めて遣わす』

「ありがたき幸せ。じゃあね」

電話を切る。再び静まり返った、独りの部屋。でも、それでいい。それがいい。

ぐう、と腹が鳴った。着替えるのは後回しにして、冷蔵庫から取り出した自社の野菜ジュースを流し込む。今や美味しいかどうかともわからないが、野菜が主力の弊社が二十五品目の野菜を使って開発した渾身の新商品だ。一日に必要な栄養分は摂れているはず。パッケージのマスコットキャラ、ベジ乃進もそう言っている。

空のパックを、ゴミ箱へ捨てる。明日には新しいゴミ袋がもう一つ、その辺に転がることになるだろう。

心配してくれる家族がいる。メッセージアプリを開けば、親しい友人の名前がずらりと並んでいる。会社の人間関係だって、良好だ。

もしも胸の内を明かせば、優しい皆は口を揃えてこう言うだろう。

『風のせいじゃない』

違う。そうじゃない。今欲しいのは、そんな慰めなんかじゃなくて、

——お前も死ねよ。

どろりと濁った声が、頭に注ぎ込まれる。

「あ……」

両手で耳を塞ぐ。握ったままだったスマホが、ごとんと床に落ちる。

「……ごめん」

掠れた声で、詫びる。

あの時、宏正を誘わなければ。

あの時、待ち合わせ時間を変えていれば。

『行ってこいよ、ヒーロー』

あの時、あんな言葉をかけなければ。

「ごめん……っ」

視界が潤む。泣いたって何も変わらないのに、溢れた涙が頬を伝う。

「ごめん、宏正……！」

痛切な呻きが、零れ落ちる。

「うう……うあああ……っ……っ……！」

血が滲むような啼泣が、たった一人の部屋に響き渡った。



目が厚ぼったい。またティッシュがなくなった。涙も鼻水も、もう一滴も出ない。最後に目を手の甲で擦って、凧は顔を上げる。

どれほど泣こうが喚こうが、やがて明日は訪れる。もしも明日を迎えることを拒否してしまえば、次に泣くのは、凧の家族を始めとする近しい人達だ。こんな体たらくの凧を今も愛してくれている人たちを裏切ることだけは、どうしたってできなかった。シャワー、浴びないと。床に落としたスマホをローテーブルに置き直して、緩めか

けたネクタイを外しかけた、そのとき。

ピコン。特徴ある通知音が、無音の部屋に響いた。

「…………え？」

どこか聞き覚えのある音に引かれるように、スマホを手取る。メールやアプリの通知の一番上に並んでいたその通知に、赤く腫れた目を見開く。

アイコンは、SNS。先だって削除したアプリのものだ。いや、それよりも、

“ヒロマサさんがログを投稿しました”

「なんで!？」

ありえない、何もかもがありえない。なのに、急ぎ通知をタップしてしまう。見開いた目に飛び込んできたのは。

中世ヨーロッパめいた城らしき絢爛な内装を背景に、何らかの紋章が刻まれた白銀の鎧を身に纏い、気恥ずかしそうに笑う親友の写真、そして。

【どうやら、俺は『勇者』になったらしい】

「……へ？」

間の抜けた声が漏れる。

もう一度、写真を見る。宏正がいる。コスプレしてる。天井を見る。目を瞑る。写真を見る。宏正がいる。息を吸う。

「ええええええええー！！！」

二章

【ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい】

―閲覧者…風／二〇二五年 九月二十五日―

言いたいことは、山ほどある。だが、まずは一言言わせてほしい、

「令和にこの世界観!？」

そんなツッコミが口を突いて出てしまったのは、いくら何でも情報量が多すぎるからだ。

真っ先に疑ったのは、AIによるフェイクだ。だが、誰が、何のために。

風を元気づけるためか。だとしても、死人にアテレコするほど悪趣味な友人知人はいない。

あるいは逆に、嫌がらせか。同業他社の営業とは小売の棚を巡って日々鎬を削っているから、恨みを買っていないとは言いきれないが。だとしても、宏正という交友関係を探り当てた上に、故人を『勇者』に仕立て上げたフェイク画像を送りつけるという周りくどい手口を思いつくとは考え辛い。そこまで行ったら普通に変態だよそれ。

そもそも、削除したSNSアプリが勝手に再ダウンロードされていること自体があり得ない。誤タップの可能性もないが、ストアを見ても例のアプリは削除され

たままだった。試しにもう一度ダウンロードしたところ、同じアイコンが二つホームに並んでしまった。

元のアプリに存在したおすすめ欄やニュース、広告もない。表示されているのは、『ヒロマサ』を名乗る投稿者のログだけだ。アプリの主アカウントである『ナギ』と『ヒロマサ』のみが相互関係にあり、その他のフォロワーフォロワーは存在しない。

SNSなら、自身のログを投稿したり、返信やいいなで反応する機能もあるのが普通だ。しかし、このアプリにも各種ボタンは存在こそするものの、いくらタップしても何の反応も起こらない。『ヒロマサ』のログのみをタイムラインに表示する、それがこのアプリに実装された唯一の機能だった。

「やっぱおかしいだろこれ!？」

取り敢えずスクリーンショットを撮って、共通の友人に相談することにする。だが、写真フォルダに保存された画像は、真っ黒に塗り潰されていた。

「怖っわぁー!!」

季節外れの怪談話に打ち震える合間にも、ピコンと次の通知がスマホの上部に表示される。

「何なんだよ、もう……」

今度はどんな怪文書が送られてきたのかと思うと、とてもではないが直視できない。目を細め、恐々タイムラインをスワイプすると。

【アーマーナイトにはなれなかったけど、この世界の人々を守ってみせるよ、風】

「……あ」

誇り高い笑みを浮かべるあの横顔が、在った。

指先が、宏正の頬にそっと触れる。硬質のガラスが、あるはずのない体温を伝えてくる。

「……宏正……なんだな」

確かめるように、問いかける。

風と宏正が交わした、あの夏の日の言葉。二人以外の誰も知らない、他愛もないやりとりが、証と化する。

——本物だ。このログを書いたのも、ここに映ってるのも、宏正だ。それだけは本

当なんだ。

「宏正……っ!!」

画像の宏正が、滲んで見えなくなる。頬を伝う涙は、もう冷たくはなかった。

このアプリが何なのか。どういう理屈で、死んだ親友が生きているのか。なんでもた、こんなゲームめいた世界で勇者を名乗ることになったのか。少なくとも今の時点では何一つわからない、それでも。

——宏正が、どこかで生きている。風だけが抱ける確信がもたらす熱が、胸に広がっていった、瞬間。

ぐううううう、と、腹が盛大に鳴った。

空腹を覚えたのは、いつぶりだろう。確か冷凍庫にうどんがあっただと、風は思った。



その晩から、『ログ』の投稿が始まった。

投稿時間は、不定期だ。朝目覚めたら通知が三件届いていることもあれば、外回りで電車に乗っている時に一件届くこともあった。

『王紀三三〇〇年 露雨の月 三十二日』、よくよく見れば、ログの投稿年月日も現代日本とはまるで違う。『宏正』がいる世界の暦なのだろうか。

投稿された情報をまとめると、こうだ。

宏正はナイフで刺されて、命を落とした。なのに、目を覚ましたら、ヨーロッパ風の床に描かれた魔法陣の中に横たわっていたらしい（アニメかゲームかな？）

宏正を『召喚』した人々が言うには、この世界では大昔、人間と魔族の全面戦争があった。相手を潰しきろうと一歩も引かなかった結果、両陣営は滅びかけた。その教訓から、百年に一度ごとに代表を立てて『決戦』を行い、勝利した陣営が統治権を得るという協定を結んだらしい（そこは戦争自体をやめようって発想になってほしかったんだけど）。

代表は、他世界からランダムで選ばれる。宏正は人間側の代表、つまり『勇者』として召喚された。一年後の決戦に備え、半年間は王城にて特訓した上で、従者一名と共に国境にある決戦場へ旅立つ（自分たちだけでやってくんない!?）。

決戦に勝利すれば、代表は『帰還の儀』を受けられる。この儀式によって、元の世界へ戻れるらしい（それはありがたいんだけど、どうすんの戸籍とか）。

言葉を選ばず言えば、荒唐無稽にも程がある。こんな話を信じていいのは、テーマパークのアトラクションか謎解き脱出ゲームくらいだ。

葬式で、遺体を目の当たりにした。火葬場で焼かれて、骨になる様まで見届けた。それなのに『異世界で勇者やってます🧡』などと言われた日には、人当たりのいい風でも眉間に皺を寄せてしまう。

だいたい、仮にそれらが事実として、どうして無関係の宏正が巻き込まれなければいけないのか。そんな憤りもあるにはある、だが。

【初めからこの世界の文字を読めるようになっていたのは、幸いだった。文化や風習と共に、法令も学んでいる。現代日本のものと比べると簡素だが、勇者が法律違反を犯すわけにはいかない】

——宏正検定、百点満点。

【街の市場に、泣いている迷子がいた。保護者を探して、引き渡す。去り際にいつもの癖で敬礼してしまったら、笑ってくれた】

——訂正、百二十点満点。

【俺の『技能』が判明した。第一技能は『鉄壁』。第二技能は『魔法剣』。第三技能は不明だが、今後発現する可能性があるらしい】

——てっぺき、覚えたんだ。凄いじゃん。

【技能に即した訓練に切り替わった。剣道や居合の経験を活かせると思ったが、実戦には全く通用しないと言われてしまった。一から覚え直す気で励む】

——実戦、か。二度と傷ついてほしくないんだけど。

【鉄壁は容易に習得できたが、魔法剣が難航している。『従者』から充填された魔力を腕や剣へ流し込んで、放つ。口で言うのは簡単だが、なかなかイメージできない】

——気功とか太極拳みたいなもんか。拳法使いの宏正もかっこいいだろうな。

【鉄の柱を切断することに成功した。コツは掴んだようだ】

——俺の親友かっこよすぎ、天才すぎ。なんでスクショ撮れないかなあ!?

思うところは山ほどある。が、ログが伝える宏正は勇者としての務めを全うしつつ、第二の生を謳歌しているように見えた。

——だったら、死んだままよりマシ。

全ての疑問をゴミ袋に詰めて蹴ってどかして、風は通知をタップし続けた。



「この前はごめんね、鈴木くん」

会社の休憩所で新品のブランドもののハンカチを返すと、鈴木は怪訝な顔をした。

「……随分と浮かれているように見えるが」

「え？　そう？　そうかな？」

口の端を緩めて、へらりと笑う。

ゴミ屋敷だった部屋は、一般社会人男性の平均程度には片付いた。髪も服装も整えているし、靴だってぴかぴかに磨き上げている。当然、仕事だって絶好調だ。何にも問題なんかないのに、鈴木は依然として険しい目を眼鏡越しに向けてくる。

浮かれている。そうかもしれない。だって、何もかも上手くいけば、宏正が帰ってくるのかもしれないのだから。現代日本で死者が蘇ることについてのあれやこれやも、不思議パワーが何とか都合をつけてくれるだろう。

「今度の新商品、平台二面OKだってさ。作業軽くて助かるって、店長さん喜んでたよ。現場が好意的だとやりやすいんだよな、ありがとう」

「は？ ……あ、ああ、そうか……それなら良かったが……」

「次も期待してるよ、主任くん」

同期との会話を一方的に切って、前を見る。ネクタイを締め直して向かう先は、風の戦場だ。いつか帰ってくる宏正に胸を張れる自分であるために。



四角に切り取られた夜のオフィス街が、流れ去っていく。揺れる電車の中、それぞれの帰路に着く社会人達同様に、風も手元のスマホを眺める。

【今日の昼食は、肉や野菜を串に刺して焼いて、木の実を煮詰めたソースをかけた料理だった。風が食べたら、美味しいと言って笑ってくれるだろうか】

【こちらの月は二つある。どちらかが地球ならいいのに】

【魔法は勇者しか使えないらしい。協定に則って、平時は魔族？ も攻めてこないから、城も城下町も至って平和な雰囲気だ。それでも、鎧を着て剣を振っていると、風と遊んだゲームの音楽が聴こえる気がする。俺がここに呼ばれたのは、運命なのかもしれない】

ログの文章が風に触れるたびに、目頭が熱くなる。人前で泣くのはしのびなくて、欠伸のふりをする。

いいなを押したい。死ぬなよ、必ず戻って来いよと返信したい。なのに、何度ボタンを押しても、画面には何の変化も起きなかった。

風に許されているのは、スマホの通知をタップして、不定期に投稿されるログに目を通すこと。それだけだった。

不満がないと言え、嘘になる。けれど、宏正が生きている姿をスマホ越しに見られるだけで、奇跡なのだ。であれば文句を言うよりも、神様か誰かの粹な計らいに感謝したかった、それはそうと。

——いつも一緒に写り込んでるこいつ、何。

凛々しい鎧姿の宏正から一步身を引くように佇む謎の男の姿を目にするたびに、風は口の端をひくつかせる。

ログによれば、男の名はグレン。本当の名は別にあるらしいが、燃えるような長い赤髪にちなんで、宏正がつけた渾名らしい。

『勇者』自身に魔力はない。古来より伝わる儀式によって勇者とラインを繋ぎ、三つの『技能』を行使するための魔力を充填する『従者』。それがグレンなのだという。 فقط、

「距離、近くない……!？」

流石に公共の場では我慢するものの、これが帰宅後の自室ともなると、つい声を乱してしまう。

認めたくはないが、グレンもまた絵になる男だった。一八〇cm前半の宏正と並んでなお、優に一〇cmは超えるだろう背丈。長身に見合う、がっしりとした体躯。ポーカーフェイスを保つ彫りの深い顔立ちの奥で瞬く、紫色の目。外国人の年齢はよくわからないが、恐らく風や宏正より若い。かといって学生という雰囲気でもないのだ、たとえばなら新卒だろうか。そんな男が騎士風の出立ちで中世ヨーロッパ風の世界に

存在しているものだから、大作洋画のPRでも観ているような気分になってしまう。

一年後の『決戦』に向けて、従者はあらゆる面において勇者に付き従う。不慣れな世界にたった独りで放り込まれた宏正をサポートしていくれていることに関しては、親友として素直に感謝している。それでも、

「だから近いって、もおおお!!」

スマホを両手で握って、風は身悶える。

ある時は、アンティーク調の机に広げた厚い本に熱心に目を通す宏正のすぐ隣で、グレンがある一文を指さしている。

またある時は、剣技の訓練中、宏正の構えを正すように腕や腰に触れている。

更にある時など、

【俺も鍛えている方だと思っていたけど、グレンはもつと凄い。特に三角筋、背筋、上腕三頭筋の絞り方は、機動隊以上だ。グレンに教わったトレーニングはこっちと似ている。世界が違ってても鍛え方は同じだなんて、何だか興味深いな】

「筋肉談義で盛り上がんな！ 俺も混ぜてよお!!」

「グレンは口数は少ないが、教え方が上手い。不慣れな俺に常に気を配ってくれているのも、よくわかる。グレンと話していると、警察官だった頃を思い出す。もう一度新任とペアを組めたみたいで、感慨深い。この世界では俺は指導を受ける立場だけど、俺から教えられることは伝えていきたい。一年間よろしく頼む、相棒」

「この泥棒猫!! 新卒赤ロン毛!!」

いつ見ても無愛想な顔をしているが、きっと悪い奴ではないのだろう。でなければ宏正が笑いかけるはずがない。

——だったら、任せるしかないんだよな。俺は何にもできないんだから。

頭では理解している。だのに何故だろう、二人が並ぶ画像を見るたびに胸が軋んで仕方がなかった。

【父さんと母さんには、きつと迷惑をかけてしまっただろうな。風との約束も守れなかった。引き継ぎもできずに穴を空けてしまつて、交番の皆にも申し訳ない】

宏正の両親にこの画面を見せたらと、考えなかったわけではない。だが、やはりフエイクだったとしたら。たとえば、風も知らない技術のテストユーザーとして選出された宏正のアカウントが、死後に自動生成されたログを投稿している。という可能性だって、未だ否定しきれないのだ。

そんな危ういものを根拠に『宏正は生きてますよ』なんて知らせたところで、かえって傷つけるだけだ。

いくつもの矛盾から目を背けて、今朝も風は目覚めるなりスマホを確認する、が。

「……あれ？」

珍しく、通知がない。いつもなら一件くらいは届いているのに。

身を起こして、アプリを立ち上げる。もしかしたら、寝惚けて通知に触れてしまったのかもしれない。であればタイムラインに新着ログが載っていそうなものだが、

「え、……マジで？」

最新ログは、昨晚見た内容から変わっていなかった。

——ま、たまにはそういうこともあるよな。

自分に言い聞かせるように頷いて、風はベッドから立ち上がる。仕事が終わる頃には、一件くらい来てるだろ。そう樂觀視して十二時間後に見た通知欄は、メール受信、お気に入り漫画の更新、掃除機ロボットやドラム式洗濯機の動作完了などで埋まっていた。

昨日を境に、通知は途絶えた。

―閲覧者…風／二〇二五年 十一月十四日―

個室の鍵を、閉める。誰の目も届かないトイレの中で、風はスマホを盗み見る。今回もやはり通知はない。諦観混じりの溜息が、狭い空間に響く。

あれから、宏正からの通知は一度もない。鷹揚に構えていられたのは、初日だけだった。翌日からは自宅や通勤中はもちろん、トイレ休憩でまでスマホをチェックする癖がついてしまった。まずいとわかってはいるのだが、週次の売上チェックをしている最中にもあのアイコンが表示されているのではないかと思うと、集中が乱れてしまう。宏正の身に、何かあったのか。訓練中に大怪我でもしたのか、それとも。二度と経験したくない悪寒が、ぞくりと身を震わせる。

ダメだ。スマホを胸ポケットに突っ込んで、風は首を横に振る。宏正は心配だが、ここは会社だ。仕事に集中しないと。フロアへ戻るべくドアの鍵に触れた、瞬間。

マナーモードに設定したスマホが、振動する。咄嗟に手で押さえるものの、心臓がどくと跳ね上がる。どうせメルマガだろうと諦めながらも、恐ろスマホを引き抜いてみれば。

“ヒロマサさんがログを投稿しました”

強くタップする。握ったスマホに表示されたのは、

【決戦場へ旅立つ】

短い一文と、一枚の画像。

例の白銀の鎧は、着ていなかった。横に控えるグレンが大きい革袋を背負っているから、その中に入っているのかもしれない。長い旅路の最中に『俺は勇者です』などと喧伝しても、厄介事を招くだけなのだろう。

肩に羽織った焦茶のマントが、肩当てや籠手、レザージャーキンとライトブルーの編み上げシャツ、ネイビーブルーのトラウザーズを隠している。黒のショートブーツも合わせれば、かつて宏正が袖を通していた制服の色合いとよく似ていた。腰には、拳銃の代わりに剣を提げている。いかにも勇者然とした格好も写真映えしているが、

冒険者らしい服装も似合っていた。癖でいいなを押してしまうが、やはり反映されなかった。

画像に写っているのは、城に背を向ける宏正とグレンだけだった。人間の期待を一身に背負った勇者の旅立ちにしては、静かすぎる。もっと盛大に見送ってもいいんじゃないかと風は首を捻る。

それだけではない。どうも引かかるのは、宏正の顔つきだ。以前は意欲に燃えていた目が、どこことなく暗い気がして仕方がない。

——なあ、どうしちゃったんだよ、宏正。

トイレの個室で、立ち尽くす。業務をこなす社員達のざわめきは、あまりにも遠い。小休憩として社会通念上許される程度の時間は、とつくに過ぎていた。

— 閲覧者… 風／二〇二五年 十二月三日 —

宏正が旅立ちを告げたあの日から、半月が経った。以前より頻度は激減したものの、三日に一度くらいログが投稿される状況が続いていた。

ただし、本文は【今日も歩いた】 【野宿にも慣れた】 【久しぶりの宿】などの短い一言、添えられていない場合の方が多いくらいだった。画像も、宏正が写っているのは手や背中など、極一部に留まっただけで表情は全く見えない。画像の大半を占めているのは、日本の都心とは縁遠い鬱蒼と茂った森や底すら見えない峡谷、清冽な川、そして濃紺の夜空に浮かぶ二つの月などの景色ばかりだった。

宏正に異変が生じたのは確かだ。だが、何があったかは全くわからない。相変わらずいいなも押せない、返信も送れない、引用転送もできない。何度か電話もかけているのだが、『おかけになった電話番号は現在使われておりません』のアナウンスが流れるだけだった。

宏正がいる世界は一日の長さが異なるのか、投稿日時の進み方がこちらの世界に比べて二倍ほど早い。いよいよ宏正が遠ざかっていく思いがして、ワイシャツとジャケ

ットで覆い隠した胸が押し潰されていく。

何かしら送ってくれるなら、宏正が生きているという証拠にはなる。AIでも容易に作成できる出所不明の画像と短文だけが、今の風を支えていた。

―閲覧者…風／二〇二五年 十二月十二日―

金曜の二十時、一週間の勤務を終えた社会人達がそれぞれの気晴らしや自宅へ向かう時間。

大型オフィスビルから出てきたスーツ姿の人々が行き交う通りを歩きながら、風は胸ポケットに入れっぱなしのスマホを手にとろうとする、と、

「あっ！」

向かいから歩いてきた人と、肩がぶつかってしまった。

「済みませんっ……！」

咄嗟に頭を下げて謝るが、相手は迷惑そうに眉を顰めて足早に去っていく。仕方がない、歩きスマホをしようとした風に非があるのだから。

仕事中には何も来なかった。昨日も、一昨日も、その前も来なかった。

――今、何してるんだ。無事なのか。生きてるのか。

決して届かない思いばかりが、脳裏を支配する。いつの間にか辿り着いていた横断歩道の手前で、足を止める。信号は赤だ。少しくらい、と風がスマホを取り出すと。

“ヒロマサさんがログを投稿しました”

「来たあっ!!」

左右から突き刺さる目線など意にも介さず、風は叫んだ。急ぎタップすれば画像や文章が表示される、はずが。

「……あれ？」

タイムラインの上に、見たことのないポップアップが浮かんでいた。

“このログを閲覧するには、パスワードを入力してください”

「パスワード!？」

何だそれと、風は愕然とする。生前の宏正もこのSNSを使っていたから、そのアカウントのパスワードを入れろと言っているのだろうか。そんなの流石にわかんないんだけど。

とりあえず駄目元で、宏正の誕生年月日を入れてみる。

パスワードに誤りがあります。正しいパスワードを入力してください”

「ちゃんとしてんなりテラシー……!!」

案の定堅牢なセキュリティに、風は歯噛みする。青に変わっていた信号にも、棒立ちの風を避けて歩いていく人々にも気づかないまま。

帰宅後、充電コードをスマホに突っ込み、風はジャケットすら着たままパスワードの解読に挑む。

名前と誕生日の組み合わせ。エラー。

出身校、小学校から大学まで。エラー。

地元の町名。エラー。

趣味、剣道、居合道、筋トレ、史跡巡り。エラー。

好きな色、藍。エラー。

好きなもの、歴史小説、神社仏閣、博物館、刺身、茶碗蒸し、緑茶、みたらし団子、ホットケーキ。エラー。

座右の銘、『やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ』。長過ぎて入力できない、エラー。

「わっかんねえよ、もおおお!!」

疲労滲む叫びと共に、ローテールに突っ伏す。パスワードの解析など、専門外だ。「なんで見せてくれないんだよ……」

スマホを握りしめて、独りごちる。タイムラインは、無機質なポップアップに遮られたままだった。

―閲覧者…風／二〇二五年 十二月二十日―

カーテン越しの仄かな光も、一LDKを照らせない。

朝という時間でもない、もう十時を過ぎているのだから。なのに掛け布団の膨らみは、微動だにしない。

パスワードつきのログは溜まる一方だった。一件も解読できないまま、一週間が過ぎた。

仕事にも支障が出ていた。人と上手く話せなくなったし、苦手な報告書の文章が全く浮かばない。取引先の店長にまで『隈が凄いが大丈夫か』と心配されてしまうほどだった。

上司には、貯まった有給を使うよう勧められた。同僚達も、無理せず休めと言ってくれた。

駄目だった。何かしていないと、それこそ壊れてしまう。なのに、土日はトイレへ行く以外は何もできず、終始ベッドに籠っている。ちょうど、今日のように。

掛け布団が作り出す暗闇の中で、風はスマホを眺め続ける。液晶が発する青白い光

が、生気のない顔を照らし出す。

今朝も、パスワード付きのログが数件届いていた。どうせ見られないのだからと、通知には触れていない。アプリアイコンの左上に、重なる未読の数字が加算されている。メッセージアプリも同様だ。

ピコン、と通知が届いた。風は唇の端を噛んだ。開いたところで見られない、わかっているのに、震える指先をスマホへ伸ばす。液晶の直前でひたと止めるも、押し込むように触れてしまう。

あの忌々しいポップアップは、なかった。代わりに表示されたのは暈された画像と、
“このログにはセンシティブな内容が含まれている可能性があります”

自分でも不思議なほど、心が動かなかった。真顔でこういった類のログを見る方法を検索して、操作して、タップ。

「……は？」

人工の光に照らされた真顔が、強張った。

肌色と肌色が、絡んでいる。冴えた白い肌が、日焼けしたブロンズ肌に身を委ねている。

穏やかな微笑みを湛えた唇が、『風』と優しく名前を呼んでくれたあの唇が、塞がれていた。赤く長い髪を背中へ流した、誰かに。

「はは、……何これ」

フェイクか、よく出来てんな。虚ろな笑いと逃避で、やり過ぎそうとする。けれど、

【グレンと、キスした】

——そんな。

【グレンの無骨な手に触れられると、体の芯が疼いてしまう】

——やめろ。触るな。

「グレンのものは太くて長くて大きくて、挿れられるのが怖かった。だが、指で丁寧に解されているうちに、これまで感じたことのない気持ちよさを覚える。もっと欲しい、欲しい、欲しい、指とは比べ物にならないほど熱くて大きい塊が押し入ってきて、俺は」

「もうやめてくれよおおっ!!」

がば、と跳ね起きるなり、風は裏返したスマホをマットレスへ力一杯押しつけた。必死に隠した画面には、夜の茂みに紛れて絡み合う二人の男が写っていた。

一枚目、屈強な体軀に組み敷かれた男は凛々しい目元を赤く染めて、薄く笑んだ口元から白い吐息を溢していた。

二枚目、男はぎゅっと目を瞑って、何かを叫んでいた。両手は更に大きな手に組み伏せられ、二色の指が絡んでいた。

三枚目、白い脚が大きく左右に開かれて、足先が天へ向いている。親指と人差し指で作った輪よりも太い男性器が、引き締まった尻の狭間に嵌り込まれている。

四枚目、二回目のキス。唇の隙間から、舌が絡んでいるのが見える。腹の上に、白濁した液体が散っている。

一瞬見てしまったただけなのに、目を閉じてても浮かんできくる。

「……俺だって」

乱れた髪を、ぐしゃりと両手で抱える。

「俺だって俺だって俺だって、おれだって、宏正のこと……ああああああっ!!」

久しく整えていない頭を、力任せに掻き耨る。泣きたくてたまらない、なのに、あれほど溢れていた涙は、もう一滴も出てこない。

「ひろまさあ……」

悲痛な声が閉ざされた部屋に響くが、誰も応えない。スマホの向こうには、決して届かない。

傾きを変えた陽光が、カーテンの隙間から差し込んだ。

外では車が走り去り、夕飯の買い物帰りらしき楽しげな親子の会話が聞こえてくる。時間が止まった部屋で、風は独り陰しい顔でスマホを再び手に取った。

宏正が、グレンに抱かれた。どうしてそうなったのか、知りたい。宏正がグレンに惹かれる理由があるなら、納得できるかもしれない。受け入れられるまで時間はかかるだろうが、何も知らないままよりはマシだ。

追加のログは送られていない。残る手かりは、パスワード付きのログだけだ。スマホのキーボードを小刻みに擦りながら、凧は宏正について知る全ての情報を片っ端から入力していく。

能碁交番。エラー。

秋島警察署。エラー。

小中高の修学旅行、大学の卒業旅行の行き先、エラー。

剣道の全国大会会場、エラー。

「あと何かあったっけ……？」

最後の心当たりは、正直自信がなかった。が、もう何でもいいやと、凧は頭に浮かんだ一語を入力する。

『nihontouten』、OK。

「通った!？」

試行錯誤の末に辿り着いたまさかの決め手が、『日本刀展』。想定外の答えに、風は驚きの声を上げた。ポップアップが消える間すらもどかしく、跳ねる心臓を抑えてタップし。

「は？」

親友が、汚れたテーブルに仰向けに寝かされていた。

手首は、頭上で縛られていた。

ライトブルーの編み上げシャツは中心から切り裂かれ、服の用を為していなかった。厚い胸元は暴かれ、濡れた乳首の周りには赤い齒形が刻まれていた。

端正な顔は恐怖に歪み、何かを叫ぶように口が開いていた。

脚はトラウザーズやロングブーツを穿いたまま、限界まで開かされていた。その間に、緩い長ズボンを足元まで落としてシミのある垂れた尻を晒した中年男が、後ろ向きに立っていた。

そいつだけではない。テーブルを囲むように立つ複数の男たちは、各々下卑た笑みや怒りを浮かべながら、無抵抗な獲物を見下ろしていた。

男たちの奥に、猿轡を噛まされて柱に縛られた長躯の男が映っていた。赤髪を振り乱して、血相を変えて乗り出そうとした体に、縄が食い込んでいる。

次。涙と鼻水にまみれて泣き崩れた顔。目の焦点が合っていないその姿に、かつての凜々しい面影はどこにもない。

次。尻の穴が、大きく口を開いていた。痛々しく腫れ上がった赤い縁から、夥しい白濁がどろりと垂れ落ちていた。

【疑いたくはないが、皆の態度が変わった気がする。言葉も対応も丁寧なのに、どこか棘がある】

【欠陥勇者、そう裏で囁かれているのを聞いてしまった】

【技能が一つ足りない。どうすれば発現できる】

【以前助けた迷子が、俺のことで友達と言いつ争いしている現場を見てしまった。あの子は泣きそうになりながら俺を庇ってくれていた。なのに何もできなかった】

【グレンは変わらず俺に接してくれる。この城の中で、グレンだけは俺を信じてくれている】

【村を襲う野盗を捕縛して、自警団に引き渡した。何故殺さなかったと、責められた】

【ナイフは、だめだ】

【グレン、君が無事なら、俺は】

【耐えろ、こんなこと、何でもない】

【壊れていく。大切なものが一つ、また一つ壊されていく】

【気持ち悪い、俺に触れる何もかもが気持ち悪い。俺がおれじゃなくなっていく】

【何もわかっていなかった。寄り添ったつもりでただけだ。誰も救えてなんかいなかった】

【痛い、痛い、やめ、抜いて】

【たすけて、風】

空気が、薄い。いくら息を吸っても足りなくて、頭がぐらんぐらん揺れている。

あいつら全員、殺してやる。そんな形だけの殺意に、何の意味があるのだろうか。どんなに手を伸ばしても、あの紛い物の世界には指先すら届かないというのに。

仮に宏正の元へ行けたとしても、もう遅すぎた。宏正の隣には、既に別の男がいる

のだから。

並べ直されたログの投稿順は、凄惨な凌辱が先だった。グレンとの情事はその直後、つまり。

あの男は宏正を奪ったわけではない。助けたのだ。深く傷ついた宏正を情愛をもつて抱くことで、癒そうとした。

——あ、そうか。そういうことか。

宏正が死んだのも。

勇者になったのも。

心も体も傷つけ穢され壊されたのも。

他の誰かと結ばれたのも、それもこれも何もかも。

——俺がヒーローなんて呼んだから。

「あ——————!!」

絶叫が、一DLKに轟いた。

【ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、……ごめんなさい
……!!】

一連の投稿を締めたのは、ひたすらに許しを請う一文だった。

三章

「お前のそういうところが、大嫌いだ」

— 閲覧者… 風／二〇二五年 十二月二十二日 —

日曜日。どうやって過ごしたか、覚えていない。

月曜日。出社はした。したんだと思う。よく覚えてないだけで。

会う人会う人に、何かを言われた気がする。多分、帰れとかならう。だって今、昼前なのに地下鉄のホームに突っ立ってるし。

さっきから何本もの電車が過ぎ去っていくのを、ぼんやりと見送っている。こんなことしてる場合じゃないのにな。最近あっちのエリアに顔出せてないし、下請けさんから出してもらった見積もりもまとめなきゃだし。でもまあ、

「……いっか、もう」

口に出すと、ふっと体が軽くなった気がした。

『まもなく、三番線に快速平坂行が到着いたします』

—— 柚月ちゃんの服のサイズ、いくつだったけ。

『白線の内側に下がって、お待ちください』

—— 預金、いくらだったけな。積立NISA解約したら少しは戻ってくるかな。

『下がってお待ちください！』

——ごめんな。謝っても謝りきれないけど。俺もそっちに、

「春山あ!!」

ぐんと体が後ろに引っ張られた、その鼻先を、トンネルの空気を押し出す勢いで快速電車が掠めていった。

足から力が抜けて、ホームにへたりこんだ。言葉を失ったまま、ただ短い呼吸を繰り返す。

気づけば、右手首に強い痛みを覚えていた。掴まれている。誰かの手に。

「……おい」

振り返れば、睨むようにこちらを見下ろす七三眼鏡の男と目が合った。

「……鈴木……くん……?」

シャープな直線眉の間には深い皺が刻まれ、閉ざされた口角は露骨に下がっている。また何か叱られるのかなとぼんやり考えるうち、硬く張り詰めていた鈴木の方が、ふっとほどけた。

「よかった……」

クールで冷静沈着、完璧すぎて最早テンプレートのような普段の表情と、今にも泣き出しそうな顔が噛み合わない。何だか不思議な気持ちになりつつ、風は首を傾げる。

「……なんで、ここにいるの……全休取った？」

「お前がとうとう受け答えもできなくなったからだろうが！」

ああ、そういえば、鈴木にも声をかけられた気がする。内容は全く耳に入ってこなかったが。

「だから後を受け追ったら、……まったく、賠償金を支払うだけの貯蓄もないくせに」

「……だね、全然足りない」

口元は笑みの形を作っていた。だが、本当に笑っているのか、そうでないのか。今の風には、わからなかった。

がたん、と電車のドアが左右に引いた。何人かの乗客が、風達を避けるように乗降していく。ラッシュ時ほどの人の流れはないものの、これ以上、ホームにへたり込んだままではいられなかった。

「立てるか」

「うん……」

引っ張られて、ようやく立てた。汚れたスラックスの尻を軽く払って、落としたままだったビジネスバッグを拾う。連れていかれたホームのベンチに腰を下ろしても、目線は足元へ落ちてしまう。

靴音が無言で遠ざかっていった。視界の端を。パンプスやスニーカーが通り過ぎていく中、不意に近づいてきたビジネスシューズが、風のすぐ側で立ち止まった。次いで、黒を基調としたデザインの缶コーヒーが、目の前に突き出された。

「これでも飲め」

「微糖がいい……」

「我儘言うな！」

受け取った缶は、素手で持てる限界の熱さを掌に伝えた。あちち、と呟いて、ステイオンタブを縦に起こす。かちりと蓋が開いて、ふわっと漂ったコーヒーの香ばしい香りが鼻先を撫る。良い匂いだと思った。

口元で傾ければ、熱を伴ったコクのある苦味が体に流れ込んで来る。冷えきった臓腑が微かに蘇っていく、そんな気がした。

風の隣に腰を下ろした鈴木も、自分の缶コーヒーに口をつける。人心地ついた頃を

見計らったのか、鈴木はおもむろに口を開いた。

「……何があったんだ」

「鈴木くんとは接点ない話なんだけど」

今の言い方は棘があった。鈴木に悪いと思いつつも、あまり踏み込んでほしくないのも、事実だった。

詫びるのも黙るのもできかねて、コーヒーの後味がする唇の端を噛む。またきつい言い方をされるかと思いきや、

「接点がないからこそ、話せることもあるだろう。……口外はしない」

「うん。鈴木くん、そういうところ律儀だもんね」

尊大な話し振りは、間違っても営業向きではない。が、与えられた課題には真摯に取り組む姿勢は、新人研修の頃から好ましいと思っていた。それに、もし鈴木が後を追ってきてくれていなかったら、今こうして缶コーヒーの温かさを感じることすらできなかっただろう。

大きく息を吸って、吐いた。下を向きながらも、風は口を開いて、

「……加具地線刺殺事件って、知ってる？」

「電車内で警察官が殺された事件だろう？」

「あれ、俺の親友」

鈴木が息を呑むのが聞こえた。

「……そうか、それは、その、何と言っているか……お悔やみ申し上げる」

「ありがとう」

ぎこちない気遣いに、淡々と礼を言った。それだけのことなのに、少しだけ気が楽になったように思えた。

「だが、あれはもう半年くらい前じゃ……済まない、失言だった」

「……いいよ、そんなの」

口を押さえながら真摯に詫びる鈴木へ、やっと目を向けられた。無関係の鈴木にこんな顔をさせたのが申し訳なくて、風はいつものように口角をきゅっと持ち上げてみせる。

「笑っちゃうよね、ポンコツすぎて。こんな前の話を引き摺って、みんなにも迷惑かけてるってのに」

「何がおかしい」

鋭い声が、得意の欺瞞を刺す。作ったばかりの笑みを強張らせる風の前で、鈴木は眉間に皺を寄せていた。けれど、

「……お前のそういうところが、大嫌いだ」

言い捨てて、鈴木は首が振じ切れんばかりに目を逸らす。残っていたコーヒーをこれみよがしに喉へ流し込むと、鈴木はこちらを一瞥もしなかった。

好かれている自覚はなかったが、とうとう面と向かって嫌いだと言われてしまった。にもかかわらず、口元がふっと緩んでしまう。

手の中のコーヒーは、まだ温かった。

今日は、このまま電車で帰る。そのつもりだったのに、

「ええ……」

強引に押し込まれたタクシーの後部座席で、風は困惑を滲ませる。

鈴木も、脱いだコートを抱えながら慣れた体で押し入ってくる。

「……まででよろしいですか？」

「はい、お願いします」

聞き出された自宅の住所の確認が済めば、エンジン音と共に窓の外が動き出す。狭い車内で悠然と組んだ長い脚がこちらに当たって、風は鈴木を軽く睨みつける。

「過保護だなあ、鈴木くんは」

「このまま一人で帰して車にでも轢かれたら、運転手が気の毒だ」

ちょっとだけ、腹が立ってきた。皮肉っぽい鈴木から目を背けて、風は外を見ることに専念する。

赤信号を示す交差点で、タクシーは静かに停止する。左折を主張するウィンカーが、カチカチ、カチカチと狭い車内に鳴り響く。

「割と羽振りいいよね、鈴木くん。副業とかやってんの」

自費で気軽にタクシーを呼べる身分に対して、別にそこまでやっかみがあったわけではない。これまで頑丈に閉ざしてきた壁を問答無用で蹴り壊されるような居心地の悪さを、どうにかしたかったただけだ。

鈴木がこちらを窺った気配がした。ふん、と鼻を鳴らすと、

「医学部に二浪した時に、父から渡された残りの学費を運用しているだけだ」

「……ノンデリでごめん」

「今に始まったことじゃない」

車が曲がる。左に座る鈴木にだけは絶対もたれかからないよう、風はアシストグリップをしっかりと握りしめた。

「今日は、その……ごめん。ありがとう。今度、メシ奢るよ」

タクシー代は受け取ってもらえなかった。別れ際、マンションのエントランスで頭を下げる。だのに、

「要らん。借りは仕事で返せ」

案の定、鈴木は素っ気ない風で踵を返してしまう。外にいるタクシーに再び乗って、会社へ戻るらしい。

足早に去っていく背中へ向かって、

「鈴木くん！」

曇りなく磨かれた靴が、止まる。

「……鈴木くんがいてくれなかったら、俺は」

ピコン、あの通知音が、マンションの廊下に響いた。

続きの言葉も、想いも、真っ白になった。

「春山？」

顔が、色を失っていく。見るなと心は叫んでいるのに、左手は引きつけられるように胸元へ向かい、スマホを手にしてしまう。

不審げな鈴木の前で通知をタップする、と。

路地裏だろうか。不揃いな石を積み上げた壁に、左手をついている。邪魔なダークブラウンのマントは左に流れて、後ろ姿が露わになっている。トラウザーズは下着ごと膝まで下ろされ、剥き出しの腰が手前に突き出されている。窪みのある尻の下には、陰囊らしき影すら見える。

それだけなら、まだ良かった。

硬く盛り上がった尻の上部を、手の甲が覆う。Vを作るように伸ばした人差し指と中指の先が触れているのは。

【早く……ここに掘り込んでくれ】

濡れそぼる濃桃色の尻穴を自ら暴きながら、煽るように振り返る。レンズにどろりと蕩けた眼差しを送りながら誰かを誘う、そんな宏正を見たことがなくて、見たくなくて、

「うぷ」

胃の中身が迫り上がってくる。咄嗟に口を右手で押さえる。ダメだダメだダメだ、せめてトイレで。

「うえ……っ………！」

酸味と苦味が混じった生温い液体が、指の隙間から噴き出した。

「春山!？」

返事はできなかった。両膝について、無様にえずく。滲んだ視界で、口元からびちゃびちゃと垂れ落ちる茶色が、ダークグレーのタイルを汚していった。



目を開いているのに、目の前が暗い。

ゴミと物が散在するリビングで、凧は膝を抱えながら蹲っていた。左手にスマホを握ったまま、顔を上げられなかった。

よくわからないうちに、始末は終わっていたようだった。多分、鈴木だ。

「……はい、そうさせていただきます。申し訳ありません」

誰かと電話している声が、頭上から降る。会話が途切れるなり、鈴木は息をついた。

「春山」

低い声で、名を呼ばれる。鈴木顔をまともに見られる気がしなかった。

「……何」

最低限、頭を傾ける。

「会社でも異常なほどスマホを気にしていたが、何かあるのか」

言えない。凧は唇を強く噛んだ。あんな話を信じてくれるとは思えなかったし、話せば親友がパスワードをかけてまで守ろうとしていたことまで、赤の他人に晒さなければならぬ。

耳が痛いほどの沈黙が、流れる。鈴木は埒が明かないとばかりに口角を下げた。し

ばらく無言でスマホを操作していたが、

「貸せ」

「何すんだよ!？」

風の左手をこじ開けるようにして、スマホが奪われる。さっき届いたばかりのログを見られるのではないかと、風は血相を変えた。

だが、鈴木は手短かに処理を済ませると、風のスマホを吟味することなくソファへ放り投げた。クッションに受け止められたスマホの画面は真っ黒で、どうやら電源をオフにされたらしい。

更に鈴木は許可なくクローゼットを漁った挙句、ダウンジャケットを投げつけてきた。ばふ、と顔に当たって、若干痛い。

「着ろ」

「さっきから人んちで好き勝手しすぎじゃない？」

「お前のせいで今日は全休なんだ、文句を言うな」

眼鏡の奥からシャープなつり目でじろりと睨まれば、返す言葉もない。ダウンジャケットを手に押し黙る風に、鈴木は一方的に告げる。

「早く支度しろ、行くぞ」

「どこにき」

「タイムパークス能碁第一駐車場」



——販促部のスピード感、何。V8エンジン？

会社を早退して駅で色々あって、家まで送ってもらって、嘔吐の処理をしてもらって、近所の駐車場へ連行されて、いつの間にか予約していたシェアカーに押し込まれて、現在位置は隣県高速道路沿いのサービスエリア、時刻は午後三時過ぎ。ルート営業でも避けたい過密スケジュールに、風は釈然としない表情を浮かべていた。

冬休みにはまだ早い十二月の平日となれば、人はまばらだった。昼食時をすぎたフードコートに一人残され、しかもスマホも強制的に家へ置いていかれては、どうにも手持ち無沙汰で仕方がない。

「待たせたな」

呼び出しベルの代わりにトレーを持った鈴木が、戻ってくる。風の前に置かれたのは、チャーシューとメンマとネギが乗せられた、オーソドックスな塩ラーメンだった。

「食べられないなら、無理はしなくていい」

言われてみれば、腹は痛いほど空いている。さっき吐いたから、なおのことだ。なのに箸に手を伸ばさない風を見て、鈴木は訝しげに尋ねてくる。

「……嫌いだったか？」

「あ、えっと、そうじゃなくて……」

大衆的なラーメンと、頭から靴の先まで『ちゃんとした』湊を見比べる。

「もっとこう、鈴木くんってブルジョワメシ派なのかなーってイメージだったからさ。懐石とかフレンチとか」

鈴木は鼻を鳴らした。だが、馬鹿にしている調子ではない。

「セルフブランディングは機能しているようだな」

そうひとりごちながら、鈴木は椅子を引いて風の向かいに座る。妙に伏目がちなのが引かなかった。セルフブランディングなんて、大抵の社会人が多かれ少なかれしていることなのに。

腑に落ちない思いをしまい込みつつ、風は割り箸を割る。湯気立つスープが絡んだ細めの麺をずると啜ると、思わず目を見開いてしまう。

「うつつま！ スープがすっきりしてんのに、出汁が濃厚！ 何だろ、魚介だったのはわかるんだけど」

「鯛のあらだそうだ。この近くは漁港も多いからな」

「へえー！ サービスエリアでこんな美味しいの食えるなんて、最高じゃん」

しばらくまともな食事を摂っていなかった胃が、貪欲にカロリーを求め始めていた。一口、また一口と啜り続ける風を見てほっと息をついた鈴木もレンゲを取り、静かにスープを口を含む。

「……変わらないな、この味は」

ぼそりと独りごちりつつ、鈴木も麺を口に運ぶ。背筋を伸ばした鈴木の一連の所作は流れるようで、その点、親友とよく似ている気がした。ただ、

「眼鏡、曇っちゃってるね」

「仕方がない。曇り止めを塗っても、こうなる」

「コンタクトにはしないんだ？」

「つけたまま寝落ちしたら眼球を傷つけるし、……言っただろう、セルフブランディングだ」と

「眼鏡装備でかしこき+十五ってこと!？」

「声が大きい……!」

白いレンズの奥で顔を真っ赤にする二歳上の同期を、初めて面白いと思った。

目的地は、まだ先らしい。再び車へ乗る際に渡された飲み物は、またも缶コーヒーだった。今度は希望どおりの微糖なのだが、

「ありがたいんだけど、次は緑茶のホットがいいな」

もう言葉もなくなるとばかりに、鈴木は露骨に口元を引き攣らせた。



車から降りた瞬間、眩い光が風顔を照らした。瞬間、

「わ……」

どこまでも続く空は、青と茜のグラデーションに彩られていた。オレンジに燃え立つ夕日の下、ダークブルーの海に光の路が通じている。

「あっちだ」

鈴木に促されて、細い階段を降りていく。スニーカーがじゃり、と砂を踏み締める、と、先程見たばかりのパノラマに入り込んだような気がする。

更に足を進めると、白い泡を連れた波の残滓が靴先を掠める。半年前の自分なら、靴も靴下も脱ぎ捨てて、素足で冷たい海へ踏み込んではいやでいたに違いない。

「昼間は違う雰囲気なんだ」

隣に佇む男を、僅かに見上げる。十二月の潮風が、七三に別れた黒髪を揺らした。

「海水が透き通っていて、砂底まで見えた。青いガラスみたいな海に太陽の光が反射して、きらきらしていて、……綺麗だったんだ」

普段は用いない言葉を溢して、鈴木は届かない水平線を見つめていた。眼鏡の奥のつり目を眺めながら、風は静かに尋ねる。

「……鈴木くんにとって、どういうところなの、ここは」

「家族で来た最後の場所だ」

「亡くなった？」

「いや、離婚だ」

「……そっか」

ざざん、ざざあん、波の音が響く。

それぞれの喪失を抱えた二人の影が、砂浜に伸びていた。



夜闇に灯る街の明かりが、前から後ろへ過ぎ去っていく。

上りのサービスエリアで軽く夕食を済ませて高速を走り、首都高に乗る頃には金色の月が一つ、空高く登っていた。

帰路では、ほとんど口を利かなかった。凧は左の窓を、湊は正面を見たま、目線すら交わらない。実を言えば、たまにこっそり様子を窺っているのだが、道路照明に照らされた鈴木横顔は、不自然なくらい凧を顧みない。

ナビに目をやる。凧の自宅を目的地としてセットされた画面が表示する到着予定時

刻は、約二十分後。そろそろ、目まぐるしかった一日も終わってしまう。

凧は唇の端を噛んだ。多分、聞かない方がいいのだろう。そうすれば、二歳差の同期という無難な関係を変えずにいられる。けれど、

「……あのさ」

重い口を、無理矢理引き剥がす。

「ずっと聞きたかったんだけど、……なんで、俺なんかに構ってくれるわけ？」

形のいいつり目が、レンズの奥から凧を顧みた。が、ものの数秒でフロントガラスへ向き直ってしまう。

「お前に恩を売っておいたら、便宜を図ってくれるかもしれないだろう」

「反社のやり口じゃん」

反射的に軽口を滑らせて、凧は再び窓の外に目を向ける。

ハンドルを強く握り直した手にも、固く引き結ばれた口元にも、気づかないふりを
して。

到着時刻が、また一分近づいた。

―外部ログ・鈴木／二〇二四年 六月十六日―

壁掛け時計の短針は、十時を回っていた。広いフロアの一部のみを、電灯が照らす。多彩な色の付箋が貼られた大量の書類やファイルに囲まれたデスクから、かたかたとキーボードを打つ音が響いていた。

モニターに映る無数の数字が、さっきから霞んで見えている。眼鏡をずらして、鈴木は目を擦った。目薬を差して瞼を閉じると、溢れた薬液が目の端を伝い落ちていく。額に垂れ落ちた前髪を払う余裕すらなかった。

――こんなはずじゃなかった。

書類に印字された文言は、『ベジミクス一刀搾り』。野菜の芯まで余すところなく活用した、食物繊維やポリフェノール豊富な野菜ジュース。弊社新商品の担当を、初めて任された。

何せ同期の中では最速で主任の肩書きを得たのだ、当然だと自負した。入社一年目から営業に同行して現場を学び、POSデータを分析し、過去の施策も徹底的に学んだ。故に、この案件も彼の輝かしい経歴を飾る一つに過ぎないのだと、疑いもしなか

った。

——なのに、だ。

リリースが見えてきた今になって、予算が二十％削減された。二十％もだ。緻密な計算の末に導き出したノベルティの原価も数量も配送料も、全てがご破算ときた。

再計算、再交渉、再手配。自信をもって積み上げた何もかもが、やり直し。しかも、前より悪い条件で。

『大丈夫か？』『手伝おうか』。様子を見かねた周囲は、何度も助け舟を出してくれていた。にもかかわらず、断った。誰に声をかけられようと、頑なに断った。主任という真新しい肩書きの元に任された案件なのだから、他人に助けられてしまっただけは評価に値しない、完璧ではない、独りでやれる。その結果が、これだ。

かれこれ二週間以上、帰宅は終電かタクシーだった。最低限の家事を終えてベッドに潜り込んでも、不安が足元から忍び寄ってくる。情報解禁初日に予約した豪華版新作ゲームは、ダウンロードさえできていなかった。

髪振り乱す勢いでキーボードを叩く背後に、父親が立っている。あの重苦しい溜息が聴こえた気がして、打鍵音が止まる。常にA判定だった国立医学部の不合格を二度

報告した時と同じだ。キーボードに乗った手が、微かに震えた。

削減後のノベルティ数量、封入資材の選定、梱包箱のサイズ、配送費。快く契約を結んでくれた取引先へ、劣った条件で見積もりを出し直さなければならぬ心苦しさ。失望する周囲の顔。父の溜息。何もかもが無造作に放り込まれた頭が、とうとう思考を放棄する。

——どうすれば。どうすれば、いい。

ぐちゃぐちゃに乱れきった頭を抱えた、その時。

「『やあやあ、拙者はベジ乃進。我らが緑央食品の癖強ゆるゆるマスコットである。エンドユーザー各位に苾まで美味しく食べてもらうべく、日夜商品開発に余念がないで御座候』」

「は？」

あまりにも唐突に、茶番劇が始まった。いつの間に入ってきたのか。顔の位置に掲げた非売品のぬいぐるみを動かしながらアテレコする男に、鈴木は胡乱な声を上げる。声から察するに、奇行の主は営業本部営業第一課配属、春山風。鈴木とは同期で、今回の新商品企画でも部署を越えて連携する立場だ。仕事はできる方らしいが、軽薄

な笑い方と馴れ馴れしい口調が、新人研修の頃からどうにも苦手だった。

「『そこなテンパリメガネ殿、義によって助太刀いたあすううう』」

「勝手に遊ぶな」

堂々と私物化しているが、あのぬいぐるみは販促企画部のラックに飾られたものだ。冷静に釘を刺すと、侍の格好をしたキャベツ頭のぬいぐるみを顔の横へ添えて、春山はにっと笑った。

「何の用だ」

邪魔するな。牽制も込めて睨み上げるも、春山はぬいぐるみを書類の上に置き、「帰るところだったんだけど、そっちのフロアに電気ついてたから覗いたら、鈴木くんが残ってたからさ。思ってたより修羅場ってんね」

春山は「お邪魔します」と隣のデスクへ一言挨拶して、勝手に隣へ座ってしまう。更には床に置いていたビジネスバッグから、缶コーヒーを二本取り出す。そのうち一本を鈴木へ差し出すなり、

「それでも飲んでさ、一旦休憩しよ」

「それどころじゃない、見ればわかるだろう」

「見てわかるから言ってるんだよ。目のクマ凄いいし、七三だって崩れてるじゃん」

七三じゃない、サイドパートだ。反論したかったが、言い争いをする気力はない。手渡された缶コーヒーが、ひたすらキーボードの上を右往左往していた手指を温めていく。かしゅっと音を立てて蓋を開け、一口含む。

休憩所の自動販売機でよく見る銘柄だ。一缶百四十円、高級志向でも何でもない。なのに眉間の皺が解けていくのは、何故なのだろう。

「学生の頃は、そこらへんの自販機で買えるのが当たり前だったけどさ。大勢の人が一生懸命届けてくれたおかげで、俺らもこうやって一息つけるんだ。ベジミクスも誰かに美味しく飲んでもらえたらいいよな。『ソウオモワナイカイ、スズキクン』」

「キャラ統一しろ」

またベジ乃進を持ち出して裏声で寸劇を始める春山に、つい構ってしまう。

改めて、手元の缶へ目を落とす。黒を基調とするデザインの缶に、ベジ乃進がメイに配置された紙パックが被る。白黒の数字で描かれたエンドユーザーが、俄かに色と形を成していく。たとえば、窓の向こうに灯るオフィスビルの一室。弁当を食べ終えたビジネスパーソンが、コンビニで買ってきたベジミクスのパッケージにストロー

を刺す。そんなイメージが、初めて浮かんだ。

空にしたばかりの缶を置くと、春山は少し声を改めた。

「本題なんだけど、ノベルティ封入指示書、あるだろ？ あれ、もっと詳しく書いた方が伝わりやすいかも」

「あれ以上書く必要があるか？ 普通はわかるだろう」

「んじゃ聞くけどさ、目玉焼きには『普通』何かける？ 醤油？ 塩？」

「醤油に決まってる」

「残念、俺マヨネーズ」

「マヨネーズ!？」

思わず声を乱してしまう鈴木に、春山はあくまで軽く笑いかける。

「な？ 普通なんて、人によって全然違うんだよ。わかんないことがあったら誰かに聞く人もいるし、自分の考えで進める人もいる。どっちが『普通』かなんて、言いきれないだろ」

一歩、いや、三歩踏み込みが甘かった。密かに唇を噛む鈴木に、春山は珍しく真面目な声色で続けた。

「だから、『この目玉焼きには①マヨネーズを大きじ一杯、黄身の周りに半径三cm塗る。②醤油小さじ二杯を黄身にかける。目玉焼きから溢れた分はキッチンペーパーで拭く』って指示すんの。つっても、あまり詳しく書きすぎると読み飛ばされることもあるから、そこはバランスだよね」

「なんだその偏執的な食べ方は……」

「例えだよ、たーとーえ!!」

言い返してくる声は大きい、顔は苦笑していた。

「俺も現場応援の経験あるけど、指示書が適当だと本当困るんだよ。いちいちこれでもいいか確認しなきゃだしさ。対応だって時間かかるし、だったら、初めからちゃんと伝えた方がお互い楽だろ」

それは、確かにそうだ。言い返せず推し黙る鈴木の前で、春山は更にビジネスバッグからクリアファイルを出した。挟まっていた印刷した最新の指示書にペンを置くと、「封入サンプル、どこ？ 今からちゃちゃっと巻き取っちゃっていい？」

「今から!？」

「うん、早めに渡さなきゃだし。元のフォーマットがすっきりしてて現場の人達も見

やすいって言ってたから、文言足すだけでいけると思う。明日確認してよ。他に現場と調整しなきゃいけないタスク、ある？」

「……棚の再調整が必要な店舗がいくつかある。メールは送っているんだが」

「メール一本で動いてくれるわけじゃないじゃん！ リストある？」

ぐいぐい迫ってくる春山から体を離しつつ、エクセルを開く。各店舗の情報と進捗を、過不足なく纏めたものだ。未完了の店舗のセルは黄色で色付けするように、マクロを組んである。

「いいね。さっすが販促部のホープ」

真剣にモニターを覗き込む顔が、近い。やたらと近い。だが、褒められて悪い気はしなかった。

「明日でいいから、送っておいてよ。外回りのついでに顔出して頼んでくるわ」

「一店舗ずつか!？」

「そうだよ。まあ任せとけって」

東西南北、日本各地の店名が並ぶエクセルの列に目を走らせながら、春山は自信ありに口角を持ち上げる。青白い発光を受ける存外整った横顔から敢えて目を離しつ

つ、鈴木は呟く。

「……どうして、俺に構うんだ。部署も違うのに」

「ここで恩売っておけば、俺がやらかした時に助けてもらえるかもしれないじゃん。持ちつ持たれつってやつだよ、鈴木くん」

冗談めかすことで気遣いさせない言い方も、人懐っこい快活な笑顔も、優しい雰囲気、黒目がちな垂れ目も、鈴木にはないものだった。

「もっとさ、頼ってよ。同じチームなんだからさ」

そう言って笑う二歳下で役職もない同期が、随分と大人びて見えた。

メールボックスに小売店からの連絡が届き始めたのは、翌日以降のことだった。

「先日は棚の調整をしていただき、ありがとうございます。直前に無理を申し上げます、大変恐れ入ります」

初めてメールではなく一件ずつ電話をかけて、鈴木は店長に直接礼を言う。声にいささか緊張が混じってしまうものの、

『いえいえ、問題ありませんよ。営業の春山さんが、こちらの状況に沿って調整して

くだきましたからね。おかげで、とてもスムーズでした』

電話口から響く朗らかな店長の声音に、やっと鈴木は胸を撫で下ろした。

春山風。同期の一人でしかなかった男に、助けられた。

悔しがないといえは嘘になる。が、もしあの時春山が茶番劇をしながら声をかけてくれなければ、この窮地を脱せられなかったのは確かだ。いや待てやっぱり要らなかっただろう、あの茶番劇は。

軽佻浮薄な態度は相入れないが、春山の営業としての能力は認めざるをえない。脳内の春山がドヤ顔でダブルピースし始めた。腹立つ。

しかし問題が全て解決したわけではない。付箋だらけで整理しきれていないファイルへ、目をやる。どうにも口元が強張ってしまいが、春山が言っていた『頼ってよ』という言葉が脳裏をよぎる。

鈴木は席を立った。ぎゅっと眉根を寄せながら重い足を無理矢理動かし、辿り着いた先は上長のデスク。

「恐れ入ります、上長。ベジミクス一刀搾り販促企画について、ご相談させていただきたいことがあります。お時間いただいてもよろしいでしょうか」

よく通る低い声が、販促企画部のフロアに響く。背中に無数の視線が刺さる。父の溜息がまた聴こえる。次に来るであろう厳しい叱責に備えて、鈴木は奥歯を噛み締めた、が。

「わかった、資料持参で第三会議室まで来なさい。十五分後でいいかな？」

全てお見通しだとばかりに笑う上長に、

「はい！ ……ありがとうございます」

心の底から、頭を下げた。

もう、父の気配は感じなかった。代わりに春山が嬉しそうな笑顔を浮かべて、サムズアップしていた。

―外部ログ…鈴木／二〇二五年 十二月二十二日―

マンションのドアが、終着地だった。

「結局、一日付き合ってもらっちゃったな」

そう言って、春山はぎこちなく笑う。駅のホームの時よりは幾分ましだが、普段の晴れやかな笑顔は未だ雲に隠れて見えない。

あの晩もらった言葉や缶コーヒーを、鈴木なりに返したつもりだった。だが、春山からは何の反応もなかった。

無理もない、と鈴木は諦観を噛みしめる。

部署を越えた遠くから眺めるうち、理解した。春山はいい奴だ。よく人を見ているし、悩みを抱えている人間がいたら、迷いなく手を差し伸べる。だからこそ、あの晩の出来事は、春山にとっては何ら特別な意味を持ち得ない。記憶に残っていないのも、無理はなかった。

「ありがとう、鈴木くん。……久しぶりに息が吸えた気がする」

鈴木を見上げる顔は、だいぶ顔色が良くなっていたように見えた。安堵でくしゃり

と崩れそうになるポーカークフェイスを必死に保ちながら、鈴木は口を開く。

「明日は出社できそうか」

「ん……多分」

「また途中で倒れたら洒落にならないからな。無理だけはするなよ」

「……そうする」

心配は残るが、夜も更けてきた。流星に帰宅しなければならない。

「じゃあな」

短く別れを告げて、今度こそ鈴木は帰ろうとした。だが、春山は返事をする代わりに垂れ目を躊躇いがちに揺らすと、

「ちょっと待ってて」

強張った声を残して、部屋へ入ってしまう。

そう言われてしまえば、帰れない。数分ほど待つと、再びドアが開いた。

「……あのさ」

緊張した面持ちの春山の手には、スマホが握られていた。

「率直に言って、これ、……どう思う？」

見せられたスマホには、どこかのスタジオで騎士らしきキャラのコスプレをしている知らない男が映っていた。

―閲覧者…風／二〇二五年 十二月二十三日―

ピンポン、と鳴り響いたインターホンの音が、天気予報を伝えるニュースに被る。宅配は頼んでなかったはずだけどなど、ワイシャツのボタンを途中まで留めながら出ると、

「開けろ」

「お引き取りください」

「開けろと言ってるだろう!!」

ピンポンピンポンピンポンと、目をつり上げた鈴木にインターホンを連打される。オートロックを突破されたら、いよいよ逃げ場がなくなる。かといって、放っておいたら管理会社に通報されかねない。

どちらを選んでも、まあ碌なことにならないのは確かだった。苦渋の想いでロックを解除すれば、侵入者の姿がモニターから消える。やがて玄関のインターホンが鳴ると、風は口をへの字に曲げながらドアを開けた。そこに立っていたのは、大きめのスーツケースを持った鈴木だった。

「マジで何事!? 今出社の準備してるんだけどお!？」

「在宅にしろ」

一方的に言い放つなり、鈴木はずかずか乗り込んでくる。まだ何か用があるのかと身構える風を振り向き、鈴木は傲然と告げた。

「仕事始めまではここに住んでやる」

「反社が闇金貸し付けに来た!!」

「うるさい! 正月早々腐乱死体で発見されなくなったら、まずカーテンと窓を開けろ! 昨日も思ったが、なんだこの埃とゴミまみれの部屋は! だらしない! それが済んだら、床に散らばっている洗濯物をまとめてもってこい! 洗濯機はどこだ!?! 始業時間までに終わらせるぞ!」

「フツ軽怖あ……」

四章

「遅いよ」

―閲覧者…風／二〇二五年 十二月二十七日―

拝啓父さん、母さん、姉ちゃん。

――俺んちが押しかけ眼鏡ヤクザに侵略されてから、四日が経ちました。

と、つい茶化した言い方をしてしまうが、鈴木が不同意同居を決め込んで以来、大いに生活が改善されたのは事実だった。

埃が待っていた部屋は、徹底的に掃除された。一時期は風の生命線だったベジミクス一刀絞りの空容器ばかりが詰まったゴミ袋は、全て集積所へ出せた。床に散らかった服やタオルは柔軟剤の仄かな香りを纏った状態で、あるべきところに収まった。平穩そのものだった半年前より整頓された部屋の居心地は、悪くなかった。何より、家事に没頭していると、常に頭を引っ掻き回しているあれやこれやを追いつける。

『窓の棧！ 埃が残っている、やり直せ！』

七三鬼軍曹もとい鈴木がもたらす喧しい静寂を、風は密かに享受した。

生活環境が整えば、次の議題は当然これだ。

ローテーブルを挟むように座った二人が見下ろす先は、風のスマホだった。

「……信じざるを得ないのは、確かだが」

苦み走った面で、鈴木は口を開く。

何故、他人のコスプレ写真を見せられているのか。当初は胡乱な顔をしていた鈴木も、諸々の証拠を見せると、半信半疑ながら認めざるを得なかったようだ。

画像は宏正の名誉を守るべく見せていないが、ログだけは要約した内容を伝えている。ただ、宏正を決定的に貶めた例の件については、どうしても口にできなかった。

「伊波さんも成人なんだろう？　だったら、誰とどんな関係を持とうが口出しできる立場じゃない」

正論だ。だが、冷静にログを見返していると、あることに気づいた。

「無理してんだよ、宏正」

「……根拠は」

「親友の直感と、営業の観察眼」

堂々と言いきり、風は続ける。

「俺だって、宏正が本当にあの赤髪が好きになったってんなら応援するよ。結婚式でだってスピーチするし動画も作るし、二次会の幹事もやるし、引き出物のバームクー

へんも泣き笑いしながら食うよ」

「涙拭け」

「ありがとう」

想像だけで涙が滲んで、差し出されたティッシュで思いきり鼻水をかんだ。そしてスマホを操作し、

「でもさ、違うだろ」

一番ましな画像を探し出す。

「宏正が笑う時って、目元がふわっと緩むんだよ」

鈴木へ突きつけたのは、宏正とグレンがキスをしている画像だった。肩から下の肌色の部分は、掌で覆い隠している。

「見てみるよ、これ。目に光がないっていうか、濁ってんじゃん。眉間なんか皺寄っちゃってるし、口角の上がり方だって不自然すぎ。キスする時つてもっとこう、幸せーとか、蕩けるーとか大好きーとか、そんな顔になるだろ」

「……知らん」

こちらは真剣なのに、何故か鈴木が顔を背けた。

ログを見返せるようになったのは、つい昨日のことだ。それでも、性の匂いが濃い画像だけは、今も見ると動悸が激しくなってしまう。

初見では、気づけなかった。何よりも大事な親友が知らない男に奪われた上、その直前に身も心も無残に引き裂かれていた。挙句、淫らに誰かを誘う姿にばかり目を奪われて、宏正を見ていなかった。よく観察すれば、あの無理矢理作ったような笑みにすぐ気づけたはずなのに。

風が痛恨を噛みしめる一方、スマホを覗き込んだ鈴木は眼鏡の奥の目を細めて観察を試みるものの、

「……よくわからん……」

「販促部でも観察眼は必要だよ？　鈴木くん」

「ご教示痛み入る……!」

煽りに乗って限界まで下がった鈴木の口角が、不意に落ち着いた。

「……二つほど、提案があるんだが」

「どんな？」

「もう一台スマホを買いえ」

「ちょっと前に画面ぶち破って修理したばっかなんだけど……」

「出費は俺が持ってやる」

「出たあゝ、ブルジョワヤクザ仕草」

「春山」

低く抑えた声が、敢えて軽口を叩いた風を縛り止める。

「今後も伊波さんのログ？ ……が投稿されるとして。お前は耐えられるのか？」

「……もし宏正が助けを求めてきたら、見ないふりはできないだろ」

「お前の想像がつかないほど酷い画像だとしたら」

「……ちゃんと受け止めるよ」

「結婚式を想像しただけで泣いていたのはどこの誰だ」

「ここの俺ですごめんなさい」

ローテーブルに額をぶつける勢いで、頭を下げる。

「かといって、スマホなしで生活もできないだろう。だから、新規契約した方を当面のメイン機にしろ。こっちはサブ機として、俺が管理する」

「は!? ダメに決まってるだろ!!」

思わず引っ掛んだスマホを、胸元に押しつけて両手で隠す。

宏正がセックスに溺れる姿を他人に見せる。拡散に加担する真似を提示されて、いよとスマホを渡せるわけがない。血相を変えて却下するが、

「画像オフにはできないのか」

「えー？ そんなのが通用……するね？」

消えた。呆気ないほど。通常のアプリと同じ操作で非表示にできたログを複雑な思いで眺める風に、鈴木は咳払いして注意を引く。

「文章は読ませてもらうが、伊波さんのプライバシーは極力保護する。今の春山に見せても問題ない、もしくは重要な内容なら都度伝える。これでどうだ」

鈴木なりに検討してくれたのだろうが、正直なところ、すぐには頷きかねた。

一連のログは、風のみへ送られた私信なのかもしれない。それを鈴木に委ねてしまうのは、宏正の信頼を裏切る行為のように思えて仕方がなかった。反面、宏正の痛々しい痴態を目にしてしまうたびに心を引きちぎられてしまうのも事実だった。

風は、迷った。迷った末に、この上なく真剣な面持ちを浮かべ、

「いいけど、俺からも一つ条件出させて」

「何だ」

「俺の親友で絶っっっ対抜かないでね」

「するか!!」

―外部ログ…鈴木／二〇二五年 十二月二十三日―

――何をやっているんだろう、俺は。

久々の掃除とシート交換を終えた寝室へ春山を追い立てて、やっと鈴木は息をついた。

たかが同期の立場で家まで踏み込んだ挙句、期間限定とはいえ同居を決め込んだのだ。通報されてもおかしくなかったと、今更ながら背筋が寒くなってくる。

だが、もしもあの荒れ果てた部屋に、春山を独り残しておいたら。『正月早々腐乱死体』という台詞も、あながち大袈裟ではなかったかもしれない。前科よりも、そちらの方がよほど恐ろしかった。

今の春山は、親友の喪失という深い傷を負っている。いずれ傷は瘡蓋に覆われていくものだ。が、それを無理矢理剥がしているのが、『ログ』と春山が呼んでいるSN Sを模した得体の知れないデータだ。

リビングの一画へ、目を向ける。キャビネットの上には、簡素な写真立てがいくつか並んでいた。

体操着姿の男子、二人。横に並ぶ足が細い布で結ばれている。察するに二人三脚の最中なのだろう。真剣な眼差しで前を見据える端正な顔立ちの少年と、額に汗を滲ませながらも笑みを浮かべてみせる垂れ目の少年。ゼッケンを見るまでもなく、どちらが春山かは一目瞭然だった。

学ランの男子、二人。背景が大仏像ということは、修学旅行か。普通に映ればいいものを、春山は右の掌を前に、左の手で受ける大仏のポーズを取るばかりか、目を瞑って顔真似までしている。隣の伊波さん、腹抱えて笑っちゃっているじゃないか。

教室、黒板にチョークで書かれたメニュー表と『2ーBコスプレカフェ』の文言。その前でポーズを決める、丈の短いスカートから男子相応の脚を突き出し、メイクとウィッグは完備、ウイंकしながら手でハートを作っているメイド姿の男子生徒と、紺色の剣道着の上から浅葱の羽織を羽織っている、絵に描いたような眉目秀麗の男子生徒。よくこんな写真をリビングなんか飾っていられるな。

桜の下、真新しいスーツを着て晴れやかに笑い合う、成人男性二人。

——もう、十分だ。

連綿と続く写真の列から、鈴木は目を逸らした。

伊波は『親友』だと、何かにつけて春山は呼ぶ。嘘ではない、だが、全てが真実ではないのだろう。それくらい、観察眼がないと評された鈴木といえど、薄々わかる。

だからこそ、写真に留められた笑みを、複雑な顔で眺めてしまう。

——あなたのせいで、春山は。

そこから先の言葉を、喉元に強く押し留める。無理に飲み込んだ感情に、臓腑を焼き尽くされる思いがしてならなかった。

『ログ』は、全て読んだ。春山と約束したとおり画像は一切見ていないが、日に二、三度届くそれらにも目を通している。

伊波がログに綴る行為の相手は、『グレン』という人物に限られているようだ。宿や野宿中と思しき赤裸々な文章は、鈴木には刺激が強すぎた。画像は伏せられているにもかかわらず、遠目で見てしまう。

真偽は一旦置いておくとして、不可解なのは、尊厳を打ち碎かれるほど過酷な目に遭ったであろう日以降、妙に性的な文言が増えたことだ。普通、二度と思い出したくないと距離を置くものではないか、しかし。

『普通なんて、人によって全然違うんだよ』

春山の言葉が、よぎる。

鈴木と伊波にとっての『普通』も、恐らく違う。考え方も、抱えていることも、その身に刻まれた傷の形や深さも。

伊波は警察官だったと聞いた。刺殺された時の報道によれば、非番にもかかわらず乗客を守って命を落としたのだという。人へ手を差し伸べることを躊躇わない春山がここまで心酔するからには、相応の人格者なのだろう。

——そんな人物が、何故。

今一度、写真立てに目をやる。切れ長の目元を綻ばせて笑う男へ敵意を向けることは、もうできなかった。

たとえば写真の列に自分が入り込む余地などないとしても。



シャワー音が、扉越しに響いてくる。

同居開始から数日経った。春山の情緒も比較的落ち着いてきた気がする。

ログは今も時折投稿されていた。相変わらず人前で目を通すことすら憚られる文言ばかりだったが、春山に見せなければ問題ない。

——完璧だ。

うんうん、と鈴木は満足げに頷く。と、

「おーい、鈴木くーん」

「どうした？」

「鈴木くんも一緒に入ろ？」

「はあ!？」

春山の無茶には慣れたつもりだったが、流石にそれは破廉恥がすぎる。それとも、銭湯の感覚なのか。友人同士なら、そういうのも不自然ではないのか。常識ばかりが詰まった頭の中をぐちゃぐちゃに掻き乱されるうち、

「独りだときあ、……寂しいんだよ」

そう言われてしまうと、無碍にできない。同情で下心を隠しながら、鈴木は返事をする。

「……わかった」

渋々を装い、脱衣所へ向かう。グレーのタートルネックとアンダーシャツを脱いでしまえば、滑稽なほどに高鳴る胸元を隠せない。

スラックスに手をかけ、息を吞む。

——いいのか、春山の前で、こんな姿になってしまって。

衣擦れが響くにつれ、目の前がぐるぐる回り出す。ブランド名が入ったブリーフを脱ぐ頃には、耳まで顔が火照ってしまう。眼鏡を外すと比喻でなく視界がぼやけて、鈴木を守るものは股間を隠すタオルしかない。これではあまりにも心許なさすぎるが、——落ち着け。大丈夫、大したことじゃない。同期同士と一緒に風呂に入るなんて、よくあることだ。多分。知らないが。

自分に言い聞かせ、深呼吸を繰り返す。赤面が治ったのを見計らって、ドアのレバーを握り、

「……入るぞ」

一言声をかけてから、開ける。全ての輪郭が曖昧になったバスルームで、湯煙がふわりと揺れた。

入浴剤を入れたのだろうか、湯は白く濁っていた。先に入っていた春山が、笑みを

もって鈴木を迎える、だが。

位置が。おかしい。次に取るべき行動を図りかねて、鈴木は逡巡する。さして広くないバスタブだ。同時に入浴するとしたら、横並びになるのが一般的ではないのか。にもかかわらず、春山はバスタブの短辺へ背を預けていた。入浴剤のせいでよく見えないが、蛇口へ向けて脚を伸ばしている可能性が高そうだ。これでは鈴木が入る余地がない。

呼びつけておいてその態度は何だと、いささか苛立ちながら鈴木は口を開く。

「……場所を空けろ」

「空いてるじゃん、ここ」

平然と言い放って、春山は目の前の湯を指差す。

「な……」

絶句した。そのまま入れば、少なからず湯の中で春山と接触してしまう。しかし、ここで動揺を露わにすれば、『あれえ？ もしかして恥ずかしいの？ 鈴木くん？』などと、春山がからかってくるのが目に見えている。

「し、仕方ないなあ!？」

若干、声が上擦ってしまった。痛恨のミスに内心歯噛みしながら、鈴木はシャワーを浴びる。バスタブに向けた背中に、視線を感じて仕方がない。

ざぶんと湯が溢れて、床に波を走らせる。水面の揺れが収まる頃には、鈴木は春山と向かい合わせてバスタブに身を委ねていた。

案の定、腰の左右に春山の脚らしき感触を覚えて、ほぐれるはずの体が強張る。鈴木も脚を伸ばした方が楽なのだが、どうやっても春山へ当たってしまいそうで、膝を曲げた脚を極力自身の方へ引き寄せる。

洪水が収まったバスルームには、水音ひとつ響かなかった。呆れるほど饒舌な春山も、今という時に限って口を噤んでしまう。鈴木も雑談の糸口を掴みたいのは山々なもの、集中できない。

手を伸ばせば触れられる距離に、春山がいる。一糸纏わぬ姿で。

今ほど、眼鏡を外していてよかったと思える時はなかった。水気を滴らせる柔らかそうな髪も、血色が良い頬も、露わな肩口も、レンズを通して見てしまったら、平常心など一瞬で碎けきってしまう。

それでも直視は憚られて、鈴木は目線を落とす。白く濃い濁りは、水面より下の

切を暈している。濡れそぼる春山の胸板も、左右に色づいているであろう乳首も、更に下にあるものも。

ぐぎぎぎぎと限界まで首を捻って、ドアを睨みつける。

「あ、温まったら、先に出ろ。俺は体を洗ってからあっ!!」

脛の間に、何かが触れた。

狭いバスタブに飽いた春山が、身じろぎしたせい。そう思ったかった。なのに足先と思しき感触は、なおも鈴木の開じた脚の狭間を挟じ開けたがっているかのように、脛を擦っていく。

「何のつもり……」

僅かな隙を突かれた。侵入を果たした足先に、タオルでは隠しきれない柔い心と硬い体をなぞられる。

「っ!」

体の奥底で火花が散った気がした。

「はっ、ははははるっ、春山っ」

声は上滑るばかりで、言葉にならない。必死に逸らしていたつもりの裸眼は目の前

で含み笑う男に釘付けで、心臓はどくどくと無様に高鳴り始める。何より、先程煽られたばかりの陰茎が昂ってしまっている。

「鈴木くん」

口元に笑みを湛えながら囁いて、春山はぎぷんと水面を揺らした。

「待て、そんな……」

弱々しい制止を払い、春山がいざり寄ってくる。ざばあと立ち上がった気配を察し、鈴木は咄嗟に目を固く瞑ってしまう、だが、

「あっ!!」

白濁した湯に隠れて屹立しきった陰茎に、ひどく熱くて硬いものが当たっていた。それが何か察してしまった瞬間、頭の中がぼつんと爆ぜた。

荒ぶり始めた息を抑えながら、恐る恐る目を見開く。吐息が交わる距離で、春山と目と目が合う。

ようやく、理解した。春山がずっと浮かべていた笑みに滲んでいたのは親密でも揶揄でもない、情欲だったのだと。

腰に跨られては、動けなかった。湯の中でもわかる熱と粘膜らしき感覚が伝える甘

い痺れに鈴木はごきゆりと息を呑み、

「い、いい、伊波さんに、悪」

震える唇に、人差し指を押し当てられる。しい、と小声で嗜めるように言われてしまえば、抵抗は意味をなさなくなる。

今も昂ぶる陰茎以外の全てから、力が抜けた。へなへたとバスタブに背を凭れかかる鈴木を見下ろして、春山は嫣然と笑む。湯に沈んだ右手を取られ、導かれた先は、

「ああ……っ……」

手の甲を包む春山の掌に、力が籠る。重ね合わせた肉幹同士を自らの手で握りしめる形になり、えもいわれぬ快感に体の芯が痺れてしまう。

献身的な同期を演じきりたいなら、毅然と振り解くべきだ。それでは不服ならば、差し出された肉体を好きに食い散らかせばいい。どちらも選べず硬直する、そんな欺瞞ごと握られた手を、上下に動かされる。

「ん……っ」

ちやぷ、ちやぷんと水面が揺れる。濁りに隠れた欲望が、扱き立てられていく。欲しくて欲しくてたまらなかった快感を惜しげもなく与えられ、幾重にも張り巡らせた

戒めがほどこけていく。せめて、せめて齒を食い縛って声を殺すも、

「あ……きもちい……」

掠れた声音が、耳にまとわりつく。もっと聞きたい、もっと喘がせたい、もっと感じさせたい、もっと。

——欲しい。

「あつ、は、あん、ああっ！」

ぎぶんと荒れた波が、バスタブから溢れ出す。露わな胸板を反らせて、春山はあれもなく身悶える。

「鈴木くん、あつ、鈴木くん……」

名を呼ぶ春山の目が、切なく潤む。そこに映っているのは、鈴木だ。鈴木だけだ。いつの間にか、春山の掌の感触が失せていた。重なる肉茎を握りしめながら性急に擦り上げる手の中に、ぬるつく液体が絡み始める。

「いい、あ、はあ、すずきく、すき、いつ！」

何もかもに耐えきれず、鈴木は固く目を瞑る。眩い闇に閉じ籠った耳元に、喘ぎに混じった白々しい愛が注がれていく。

ばしゃ、ばしゃんと荒れる水面の音が遠のく。ぐちゅぐちゅと粘液が泡立つ音と暴力的な快楽に頭から吞まれ、獣めいた呼吸が耳に反響する。

「いく、も、いくつ、いくうつ!!」

春山の嬌声に唸りにも似た呻きが交わり、そして。

一人分の白濁を、掌に吐き出した。

深い溜息が、トイレに沈んだ。

見下ろした右の掌には、夥しい精液が飛び散っていた。からからとティッシュロールを回転させて、鈴木は罪の残滓を拭い取る。消臭スプレーも念入りに撒いて、証拠隠滅を図る。

ドアを幾重にも隔てた先からは、今もシャワー音が響いている。今夜も無事に隠しておせたことに、鈴木は後ろめたい安堵を抱いた。

春山が席を外している間に、自らを慰める。鈴木がこの悪癖を覚えてしまったのは、一昨日からだった。

初めから下心ありきで乗り込んだわけではない。別人のように憔悴した春山を放つ

ておけなかった、それは今なお変わらぬ本心だと宣誓できる。

だが、会社よりずっと近い距離ですれ違うたびに感じる、春山の匂い。スーツではない、私服姿。真正面で食事するたびに見えてしまう口元。ソファに身を委ねてリラックスしている表情。日常の至るところで春山を感じるたびに、密かに蒔かれた欲の種は音もなく芽吹いていった。

『えー、鈴木くんにおかれましては日頃のご厚情に報いるべく、……好きにしていよ。俺のこと』

どれだけ取り繕ったところで、結局はこれだ。献身の報酬として、春山の心と身体を捧げられたかった。とつくに死んだはずの男などではなく、今隣で何くれとなく世話を焼いている鈴木自身を見てほしかったのだ。

あの柔らかな癖毛を、そっと撫でたい。目線より少し低い背丈の体を抱きしめて、肌を重ねたい。軽口を叩いてばかりの唇を塞いで、体温を分かち合いたい。あわよくば服を一枚ずつ脱がせて、ベッドに裸身を横たえて、左右へ広げた脚を抱えて、腰を沈めて、体を繋げて。

『……好きだよ、鈴木くん』

頬を紅潮させた春山に、微笑まれない。それはとても、

——最低だ。

首を横に振り、鈴木は項垂れる。

春山が、好きだ。手を差し伸べられたあの日から、部署も異なる春山を目で追うようになった。遠くから眺めつつ、たまに同期としての会話を交わすだけで良かった。ずっと、そうしてきたように。

男性が好きだった。学生時代の淡い初恋を含めて、男性を相手に恋愛感情を抱いたことは何度かあるが、告白、交際、ましてやセックスなど一度もしたことがない。

父が、怖い。ただでさえ進路を外れて父に失望された身だ。更に後継も望めない性的嗜好を持っているのだとカミングアウトするなど、考えるだけで血の気が引く。

『キスする時ってもっとこう、幸せーとか、蕩けるーとか大好きーとか、そんな顔になるだろ』

さも当然のように春山は言うが、そんなもの、鈴木は知らない。これから先、知ることすらないのだろう。

洗面台のレバーハンドルを下げて、水を止める。完全犯罪の仕上げとしてタオルで手を拭くうち、バスルームのドアがからりと開く音がした。

「鈴木くん……」

次いで、びっちゃびっちゃと多分に水を含む足音が脱衣所から近づいてくる。

「何……おわあああああ!!」

リビングへ顔を出した途端らしからぬ絶叫を上げてしまったのは、全身ずぶ濡れの春山が真っ裸で突っ立っていたからだ。

「タオルと下着、どこお？」

「そ、そこ、そつ、そこに置いたままだ！」

ソファーに放置されたバスタオルと下着を、引っ掴んで押しつける。極力春山を見ないよう、限界まで首を捻りながら。

「ありがと。持ってくの忘れちゃってさ」

人の気も知らないで、黒のボクサーパンツを穿きながら春山は呑気に笑う。

「お……お前って奴は……!!」

フロアリングにぽたぽたと水滴を垂らし続ける春山の頭にバスタオルを被せて、わ

しやわしやと力任せに拭く。春山に見られなくて本当に良かったと、羞恥に顔を火照らせながら鈴木は安堵した。

—閲覧者…風／二〇二四年 七月十二日？—

ケースの中に、二振りの日本刀が展示されていた。

照明を受けて輝く鋼の曲線は、確かに綺麗だ。なのだが、

—違いって、ええと。長さ？

長さが異なる刀を交互に見比べてみるも、どうにも違いがわからない。事前に予習してきた鑑賞ポイントは、頭から流れ去ってしまった。風は首を捻るついでに隣の宏正、——宏正？——へ目をやる。日本刀に見入る眼差しは瑞々しい憧憬に満ちていて、子どもの頃を思い出すものの。

——何が、違うんだらう。

やっぱり、わからない。けどまあいいか、久しぶりのデートなんだし。自分を納得させて、引き続き宏正を眺めることにする。

どこのショッピングモールにも入っているファストファッションのシンプルなシャツも、端正な顔と鍛えた長身を持つ宏正が着れば、有名ブランドの新作に見えてくる。

——どこまでかっこいいんだよ、俺の親友は。

緩んだ口角が、ケースに映り込む。

人気の展示らしく、場内は混雑していた。ある程度のところで鑑賞を切り上げて、最前列を譲らなければならない。

「ごめん、つい見入ってしまった。待たせてすまない、凧」

小声で詫びて、宏正は凧の手を握った。冷房の効いた館内で感じる温もりを噛みしめながら、

「気にすんな」

竹刀を振り続けて硬くなった手を、握り返す。切れ長の目元を緩めて微笑む顔が、泣きたくなるほど愛おしかった。

人混みの下で繋がれた手は、展示を離れてなお誰の目にも触れることはなかった。



「宏正」

首筋に腕を絡めると、僅かに屈んでくれる。凧も少しばかり背伸びして、いつもの

ようにキスをする。

夜の寝室に、密やかな笑い声が響き合う。今日のデートは、最高だった。展覧会では宏正の横顔を堪能できたし、宏正バンクは旨い刺身と酒による支払いの結果、残高ゼロ円。何より最高なのが、宏正のスマホが丸一日鳴らずに済んだ。街の平和に、凧は心から感謝する。

カーテン越しの薄明かりが、宏正を仄かに照らし出す。優しい微笑を湛える唇に、もっとキスしたくなる。

柔い唇を啄むと、宏正は撥ったそうに笑う。舌を入れると見せかけて、ちろりと舐めて焦らすと、宏正の方から舌を絡ませてくる。求められる悦びに胸を灼かれながら、凧は唾液ごと舌を吸い上げる。

大好き。蕩ける。幸せ。そんな言葉を噛みしめながら。

首筋に絡めていた手を、下へ滑らせていく。左手は背中へ、右手は、

「あ……っ」

引き締まった尻を、すり、と撫でる。

「こら」

悪戯を嗜められるが、宏正ときたら顔も声も笑ってしまっている。叱られた犬のようにしれっとそっぽを向いてみるも、

「っひゃあ!？」

素っ頓狂な声を上げてしまったのは、背中をつうとなぞられたからだ。ますます高まる笑い声に煽られて、妙な闘志が湧いてくる。両手をわきわきと握り開き、

「見てろよ？ 柔道無段T O E I C七〇五点、営業四年目の実力を……！」

「それほど戦力外、つく、っははは、くすぐ、撥ったいって、風いっ！」

左右から脇腹を責め立てると、宏正はひいひいとも悶える。鍛え込んだ身体も、櫟りには弱いらしい。防御すら俟たない宏正をじわじわと奥へ追いやって、

「わっ！」

二人揃って、ベッドへ斜めに雪崩れ込む。子どものように戯れる成人男性たちを受け止めたマットレスが、ぼふんと弾んだ。

折り重なった胸が、心地よく高鳴っていく。こんなに幸せなことがあるかと、涙さえ滲んでしまう。何よりも大切な親友、いや、恋人を抱きしめて、

「……大好きだ。宏正」

宏正の首元へ顔を埋め、頬を擦り寄せる。大きな手に癖毛と背中を優しく撫でられて、閉じた目の端から涙が一滴、零れ落ちた。

「風……」

低く穏やかな声に名を呼ばれる、が。

「もっと早く言ってくれば良かったのに」

淡々とした声音が形作った憎悪を、心臓へ深く突き立てられた。反射的に身を起すと、

「ひっ!？」

横たわる宏正の背から、影のような染みがシートに広がっていく。

「あ……」

何度も何度もナイフに刺された背中が、フラッシュバックする。体を流れる血が凍っていく。

虚ろな光が、宏正の切れ長の目に宿る。口元が紙一枚ほどの笑みを滲ませる。凄惨な微笑を浮かべた相貌に、びちゃ、びちゃ、と白く濁った生臭い液が四方からかけられていく。

「やめ……」

無意味な制止が、戦慄く。指先一つ動かせない風の前で、白濁液は宏正の顔ばかりか、胸元をも汚していく。どろりと垂れる欲望にまみれながらも、宏正の口角は上がったままだった。

「……ごめん、なさ」

震える声で詫びを告げかけた声が、喉奥に引っ込む。

白く濁った液が、黒ずんでいく。それどころか、液が飛び散った箇所の肉体が、服ごと黒ずんで、溶けて、腐り落ちていく。

「だめ、やだ、待って、……ひろまさあ……」

膝について、崩れゆく体を少しでも留めようと抱きしめる。だが、そこかしこで行っている腐敗を止められるわけがなかった。右の頬は顎の骨や歯が剥き出しで、紅く爛れた肉には白く小さい何かが無数に蠢いている。

「ひろまさ、宏正あ!!」

掌から漏れゆく濁った茶色の汁を必死に抑えながら、風は声を涸らして叫ぶ。

「俺が代わる、何でもする、どんな目に遭ってもいい、だから、宏正だけはっ」

誰に懇願しているのかもわからないまま、凧は声を張り上げる、だが。

半分だけ肉を残した口元から、笑みが失せた。真顔でじっと凧を見据え、

「遅いよ」

ばち、と目を見開く。見慣れた寢室の天井が目に入ってくるまで、しばらくかかった。

インナーはもちろん、パジャマまで寢汗でぐっしり濡れている。凧は恐る恐る横を見てみるが、腐乱死体が寝そべっている様子は無い。

肺に溜まった空気を、吐き出す。毛布を被っているのに寒くて寒くて仕方がなく、

凧は横様に寝転がって身を屈めた。

「宏正……」

自身を掻き抱くうち、その手は何一つ守れなかったことを思い出す。じわりと涙が溢れて、暗い寢室が輪郭を失う。

「う……うあ……ああ……っ……」

声を殺しながら、嗚咽した。

寝室のドアの隙間から、リビングの光が微かに漏れていることにも気づかずに。

―閲覧者…風／二〇二五年 十二月二十八日―

久々に目が腫れぼったい。擦り擦り寝室のドアを開け、

「おはよう……」

ふわぁと口を押さえながら欠伸すると、

「やっと起きたか」

こちらを一瞥すると、鈴木はコンロに向かう。既に身支度を終えている上に、エプロンまで完備している。相変わらずきっちりしてて偉いなあ、などと思いつつ、風はパジャマ姿のままローテーブルに着こうとするが、

「先に着替えてから来いと何度も言っているだろう！ 終わったらテーブルを拭け、箸を並べろ、配膳を手伝え！」

「アイアイサー、七三眼鏡ママ軍曹」

「要素が過積載すぎる」

ともあれ、ほどなくローテーブルには今日の朝食が並ぶ。白米、卵焼き、焼き魚、小鉢の惣菜、漬け物、そして豆腐とねぎとわかめの味噌汁。

「シンプルにうまそうー！　いただきます」

ぱんと両手を合わせて、卵焼きを口へ運べば、

「……うんまあ……」

薄く巻かれた卵の層から、ふんわりと卵のまろやかさが溢れ出す。焼き魚も外の香ばしさと中のほろほろ崩れる旨味がたまらない。極めつけは、味噌汁だ。鼻先と舌を擦る出汁の風味と味噌、何かしら隠し味が含まれていそうだが、素朴な具材と相俟って、体の中から温まっていく。

「どれも丁寧っていうか、一手間かかってる味がする。漬け物も自家製？」

「それは流石に買ってきた」

「いいじゃん、時短時短。にしてもき。鈴木くん、料理上手いね」

「まあな！」

思わず褒めると、鈴木は飯碗と箸を持ったまま、得意げに胸を張ってふふんと笑んだ。上機嫌で白米をひよいぱくひよいぱく口へ運ぶ姿は、

——可愛いところ、あるじゃん。

ちらりと目で追いながら、皿も味噌汁を口にする。会社で褒められても当然と受け

取るか、謙虚に否定する姿しか見たことのない。その鈴木が、風の言葉を素直に受け取って喜んでいると、悪い気はしなかった。

大晦日も近い。そろそろ大掃除の支度もしないかなと思いつながら、柔らかな豆腐を箸で摘んだ、瞬間。

ピコン、通知が鳴った。

「ああ、来たか」

汁椀を持つ手が、強張る。

——落ち着け、鈴木くんがチェックしてくれるだろう。

なおも目が揺らいでしまう風とは裏腹に、鈴木は平然とスマホを手取る。慣れた調子で何度かタップすると、

『ああつ、チンポいい、チンポきもちいい、デカチンポでケツマンの奥までガン掘りされるのすき、大好きいつ』

がん、とローテーブルが鈍い音を立てた。傾いた腕から溢れた味噌汁が、ぼたぼた

と太腿を濡らす。箸はかん、からからと乾いた音を立ててローテーブルを転がり、フ
ローリングへ落ちる。

鈴木顔も、真っ青だった。慌ててスマホを弄ると、さっと後ろへ隠し、

「あ、ああ、しまったあ！ 昨日こっそり隠れて観ていた動画をうっかり再生してしま
ったなああ？ はは、ははははは、は……」

遠くで、雑音が鳴っている。ラジオの砂嵐にも似た音がざあざあど脳裏に反響する。

「……済まない。迂闊だった……まさか音声まで送られてくるとは……」

右手を突き出した。

「ん？ ……いや、これは……」

右手を突き出した。

「……駄目だ」

右手を突き出

「駄目だと言ってる!!」

ばあん、とローテーブルを平手で強く叩く音が、食卓を揺るがせた。突き出した右
手は微動だにせず、鈴木が隠したものを無言で要求し続ける。

目線が衝突する。鋭い眼差しを突きつけていた鈴木ははっと目を開くと、にわかには味の悪さを嘔みしめるような表情に変わる。

「……怒鳴って悪かった、だが」

「いいから」

短く、最後の一言を告げた。

ごうんごうんと、洗濯機が永遠に回り続けている。

不意に、鈴木が風から目を逸らした。苦渋に満ちた面持ちの鈴木が差し出したものを、受け取る。人差し指で迷いなく操作し、鍵を開けていく。

【足りない。何でもいいから、俺の穴を全て埋めて、犯してくれ】

【あれは正当防衛だ。この世界の法令でも保証されている。俺は責務を果たしただけ】

【洗っても、洗っても、落ちない。臭いも、汚れも、感触も】

【三本、調達。客引きを装ったら、疑いもなく着いてきた。笑える】

【下手な慰めを受けるより、排泄用の穴として遊ばれた方が気が楽だ。三本とも大して太くも長くもないが、口も尻も手も同時に犯されるのは悪くない】

【酷い言葉を使うと、何故か無性に興奮する。グレンが聞いたら幻滅するだろうな】

【やっと気持ち良くなってきた。もつと奥まで貫いて、喉に精液を流し込んで、俺は皆の玩具なんだと体に教え込んでくれ】

再生ボタンの背面には、男の腰に跨る宏正の裸身が映っていた。両手は赤黒い肉茎を握り、片方の亀頭へ顔を寄せて舌を突き出している。膝を大胆に左右へ開いた奥では、尻の狭間に男の陰茎を突き立てられている様がよくわかる。楚々とした黒い茂みから屹立しているものが、否が応でも見えてしまう。しかしその顔は笑みを作っていないもの、どこかぎこちなさが滲んでいるように見えて仕方がない。

呼吸を忘れていた。肺に溜まった息を吐き出して、風はスマホをテーブルに伏せた。僅かに安堵した様子の鈴木へ目を向け、

「そういえばさ、鈴木くん」

「何だ？」

「言ってなかったよね。なんで宏正がこんな目に遭ってるのか」

「それは、この世界で勇者……？ に選ばれたからじゃないのか」

「俺だよ」

「は？」

「俺が『ヒーロー』なんて呼んだから、宏正は死んだんだ。んなこと言ったら、丸腰でも犯人取り押さえに行くに決まってるじゃん。真面目なんだから、あいつ」

眉を顰める鈴木を前に、殊更に口角を引き上げて、悪辣な魔王を演じ始める。だってそうだろう。魔王さえないなきゃ、勇者は生まれなかったんだから。

「宏正が死ななきゃ、こんなゲームのパクリみたいな世界へ行くことも、勇者だか何だか知らねえけど、よってたかって持ち上げられたり掌返されたり、あんな連中に滅茶苦茶にされることもなかったんだ。だからこれ、全部俺のせいなんだよ」

誰にも言えなかった自責が、ぼろぼろと溢れ出していく。言葉、あるいは涙と化して。

「なのに元凶の俺だけのうのと生きてるってき、ひどくない？ 今だって飯作ってもらって美味いとか喜んじゃってるってんだよ、おかしいよね？ やっぱさあ、あの時ホームに落ちて死んでた方が」

「いい加減にしろクソガキ!!」

聞いたことのない言葉と見たことのない形相に一喝され、風の口は止まった。

今度は鈴木は黙らなかつた。それどころか、風を冷然と見下すと、

「たらればに耽溺していれば前を向かずに済むから、楽でいいな」

「……は？」

風の口角から、偽の笑みが消えた。

——お前なんか何がわかるってんだよ。

腹の底に沈めていた感情が、ふつふつと熱く弾け始める。これを言ったら終わりだとわかっている、わかっているのに。

「あのさあ」

押し殺した声音が、形を成してしまう。

「そうやってずかずか踏み込んでくるの、そっちこそいい加減にしてくれない？ ただの同期じゃん、あんた」

煮えたぎる鬱屈を剥き出しの敵意で包んで、ぐしゃりと丸めて投げつけた。

鈴木は怯まなかった。鋭利な視線を正面から受け止めて、凧もまた一步も引かなかった。

洗濯機の終了音が、ピーピーと高らかに鳴った。鈴木は息をつくとき、スマホを手にとった。いくらか操作して、凧へスマホを渡してくる。

「……もう一度、伊波さんのログを読み直してみろ」

「読んだよ、とっくに」

「全てだ。俺が預かっていた期間は読んでいないだろう」

そう言われると、反論できない。不承不承受け取って、長い長いログをスワイプし、先頭へ辿り着く。

【どうやら、俺は『勇者』になったらしい】

全ての始まりとなったログも、今になっては痛々しくて仕方がなかった。

スワイプを続ける。異世界に馴染んでいく宏正。使命に燃える宏正。グレンと親しくなっていく宏正。しかしその先は。

顔を上げるも、鈴木と目が合ってしまう。読め、と促され、仕方なく顔を下げる。

大切な親友が四方八方から傷つけられていく生々しい記録に動悸を抑えながら、それでも何とか目を通し終える。

「……読んだけど？」

はぁ、とこれ見よがしに溜息をついて鈴木を睨み返す。だが、鈴木は思いの外穏やかな顔つきに変わり、

「春山を責めるような言葉はあったか？」

風の瞳孔が微かに開いた。

ない。確かに。見ず知らずの男たちに穢された時も、グレンとの快楽に溺れている時も、宏正は責めなかった。風のことも、誰のことも。

わかっていた。あの言葉に縛られているのは宏正ではない、風自身だ。親友を失っ

た傷を自ら針で繰り返し突き刺して、苦痛に溺れる。そうすることで、宏正との結びつきを放すまいと足掻いていたのだ。

「……ないよ。わかってるよ、そんなの」

溜息と共に口に出してしまえば、僅かに気が楽になった。あとは自虐という名の針を捨てさえすれば、自由になれる。けれど、だけど、

「宏正と離れるのも、あんな目に遭ってるのも……辛い、すごい辛い。なのに、俺は何もできなくて、宏正は助けてって言ったのに、俺はどうしたらいいか、……わかんないんだ……!!」

嗚咽と共に、涙がぼろぼろこぼれてくる。初めて人前で吐露した心情が、止め処なく溢れ出してしまう。けれど、不思議と頬を濡らす涙は温かく感じた。

震える肩と背中が、不意に人の体温と感触に包まれる。自らを傷つけ続けた風を、受け止めてくれる。

——だよなあ。知ってた。

しゃくりあげつつ、風は冷静に思った。

考えるまでもない。ただの同期があれこれ甲斐甲斐しく世話を焼いたり外へ連れ出

したり、押しかけ同居まで始めるわけがないのだから。

——鈴木くん。

胸の内で、呼びかける。指先が微かに動くが、ぎゅっと手を握りしめる。

もし、何とかの儀だかが成功して、宏正が帰ってきたら。その時、宏正が立つべき位置に鈴木がいたら。

——そんなの、宏正が可哀想すぎるだろ。

爪が掌に食い込む。血が滲む思いで、尻は手を握り続ける。

冷えた味噌汁が、またテーブルから滴っ

五章

「似たもの同士だね、俺たち」

—閲覧者…風／二〇二五年 十二月二十九日—

「……てことなんで、今年の年越しはうちでやるよ。だーいじょうぶだって、ちゃんと食ってる！ いやほんとほんと、昨日だって眼鏡鍋奉行プレゼンツ豪華A5和牛スキ焼きフェスだったし。……うん、本当、大丈夫だから。心配かけてごめん。母さん達も体に気をつけて。……じゃ、良いお年を」

赤いボタンをタップして、通話を終える。年末の挨拶を前倒しで済ませて、風は息をついた。

——気つつまづ。

昨日はあれだけのことがあったのだ。ある程度落ち着きはしたものの、鈴木と顔を合わせ辛くて仕方がない。大掃除という名目で寝室へ逃げ込んできたものの、不用品を放り込むはずのゴミ袋は依然として空のままだった。

豪華A5和牛スキ焼きフェスは、誇張ではない。独りで買い出しに行った鈴木がエコバッグから出してきたのは、一パック四桁円の牛肉だったのだから。目にした時はひえっと小さな悲鳴が出たものだが、鈴木なりの気遣いなのだろうと思えば、無碍に

拒絶もできなかったし、実際美味かった、だが。

鮮やかな赤身に細く白い筋が幾重にも走る霜降り肉は、心に重すぎた。

「春山！ そっちは進んでるんだろうな」

ドア越しに急かされて、びくんと体が震えてしまう。

「鋭意対応中でーす」

取り急ぎ場を持たせると、買取へ回す服を選別する。あれは古い、これはいまいちだったと段ボール箱へ放り込んでいくと、物で溢れていたクローゼットが整っていく。

——頭の中も、こんな風に整理できたらいいのにな。

宏正のこと、鈴木のこと。散らかった頭を抱えて、風は密かに溜息をついた。

一通り済ませてドアを開けると、鈴木がいない。見回すと、ベランダのガラス戸を内側から拭いている背中が見えた。

白状すれば、鈴木を見るだけで、うっと息が詰まってしまう。幸い、鈴木が振り返る気配はない。このままやり過ごしてしまおうと、風はそろりそろりとキッチンの掃除へ回ろうとする、が。

鈴木が拭いているのは、風の家の窓だ。自分の家の大掃除や、他の予定だってあったはずなのに。

風は口の端を引き結んだ。キッチンへ向かおうとしていた足先を、ベランダへ換える。

「……ありがと。外はまだだろ、手伝うよ」

「ああ、任せた」

そう応える鈴木の様子は、至って普通だった。第二ラウンドを開幕せずに済んだことにほっとしながら、風はダウンジャケットを羽織る。

ベランダでサンダルを履くより早く、真冬の寒風に吹きさらされる。寒い寒いとぼやきながら、濡らしたマイクロファイバータオルで外側を拭き始める。うつすら白かったガラスが元の透明感を取り戻していく様を見るのは、気持ち良かった。

向かい合って作業しているにもかかわらず、どちらも無言の時間が続く。一片の曇りも許さないとばかりに真剣に窓を擦る鈴木を窺いながら、風は重い口を開く。

「……あのき……」

「何だ」

鈴木は手を止めず、ガラス戸越しに声を返した。

「昨日は、……昨日も、ありがとう。鈴木くんが引き留めてくれなかったら、俺はとつくに戻れないところまで行ってた」

「……そうか」

受け入れたのか、聞き流したのか。どちらともつかない調子で、鈴木は答える。それでも、今伝えなければいけない気がして、風は言葉が続けた。

「初めから、そうだったよな。宏正のことで頭いっぱいになってた俺を、ずっと気にかけてくれてたんだ。今だって、俺が独りにならないようそばにいてくれて、ほんと、ありがたいと思ってる。すき焼きも美味かったし。……ただ、さ」

ガラスの裏側のタオルが、止まる。

「……俺、鈴木くんにも何も返せないよ」

項垂れかけた顔を上げる。無言の鈴木を見据えて、風は静かに告げた。

ずっと、鈴木に甘えてきた。鈴木が風へ抱いている想いを臆げながら理解した上で、都合がいい時だけその肩へ寄りかかっていた。

昨日だって、そうだ。鈴木が何も言わずに差し出した厚意を美味しい美味しいと食べて、

だのに心の中では宏正のことばかりを考えている。そう、口の中でとろけるA5和牛を噛みしめるうちに気づいてしまった、それって。

——いくらなんでも、酷すぎるだろ。

自覚してしまったからには、自ら線を引くべきだった。でなければ鈴木に申し訳が立たないし、自分自身を許せそうになかった、だから。

「……ごめん」

深く、頭を下げた。が、

「何だ、そんなことか」

「へ？」

返った声音はあっさりしていて、むしろ風の方が呆氣に取られてしまう。

「お前に救われた恩を返しているだけだ。気にするな」

再び窓ガラスを擦り始めた鈴木と、目線が外れてしまう。独り取り残された風は首を傾げて、

「俺、なんかしたっけ……?」

「覚えていないなら、いい」

「いや教えてよ！　その辺全っ然わかんないまま家まで来てもらってるこっちの身にもなって!？」

素っ気ないというよりは、どこか拗ねている風の鈴木に食い下がるも、

「……あ」

機械的な振動音が、ベランダに響く。鈴木は顔色を変えて、平たい四角の板が入ったポケットへ手をやった。強張った顔つきで風を窺うと、

「……株価、チェック、……してくる」

あまりにもぎこちない一言と泡まみれのタオルを残して、鈴木は風呂場まで駆け込んでいった。嘘下手か。

ベランダに独り取り残された風は、しばし茫然とタオルを握りしめていた。ガラス戸はまだ半分も汚れたままだった。

「……やば」

ぽつりと呟いて、掃除を再開する。が、どうにも心は上の空で、ずっと同じところを拭いていることにすら気づけない。

鈴木の反応からして、あの通知はやはり宏正のログだろう。平静を保ったまま向き

合えるか、正直あまり自信はなかった。けれど、いつまでも鈴木に確認を頼ってばかりはいられないのも事実だ。

——宏正が送ってきてるんだ。どんな文でも受け止めるのが親友ってもんだろう。大きく息を吸って覚悟を決めるも、

「春山！」

ばたばたと騒がしく戻ってきた鈴木の様子は、意外にも明るかった。なにになと訊ねる前にガラス越しに見せられたスマホの画面には、

【あと七日ほどで決戦場へ着く】

短い文に添付された画像に映っていたのは、旅装束を纏ってグレンと共に街道らしき道を歩んでいく宏正の姿だった。前を向く横顔は、かつて風が隣で見てきたものと同じ強さを秘めていた。

決戦場へ着く。魔王と戦って、勝つ。帰還の儀を受けて、帰る。

——帰ってくる、宏正が。

「……やっつったぁー……!!」

「近所！ 迷惑！」



異世界の一日は、こちらの半日に相当する。つまり、宏正が決戦場へ着くまであと四日、来年の一月二日となる。年末年始の祝賀ムードと相俟って、風の心は綿飴よりもふわっふわに浮かれた。浮かれきっていた。

「ひゅっまっさがー帰ってくるうーフフン♪ フォウ！」

風呂用洗剤をスプレーした湯船をスポンジで擦りつつ、即興自作ソングまで歌う始末だった。なお、ふと顔を上げたら、畳んだバスタオルを抱えてドン引きする鈴木と鏡越しに目が合った。

一方、引き続き投稿されるログは、至って真っ当だった。ひたすらに街道を歩む姿や、来るべき決戦に向けてグレンと剣術の特訓をしている様子など、以前と変わらな

い宏正がそこにいた。

久しぶりに、通知が待ち遠しくてたまらなくなる。鈴木もスマホが振動するたびに風を呼んで、自分から画面を見せるようになった。グレンと共に技能の再確認をしている様を真剣に眺めつつ、

「鉄壁と魔法剣……本来ならあと一つ『技能』があるはずなんだよな？」

「らしいよ。最終決戦で秘められた力が遂に発動！ イベント戦！ ダメージカンスト！ なんてなったら熱いよね」

「わかる」

真顔で深く頷いた鈴木に、訊ねてみる。

「もしかして鈴木くん、ゲームとか好き？」

鈴木は無言で浅く頷いた。そんな感じがしていた。でも、本当に聞きたかったことは、そうじゃなく。

——宏正が帰ってくるの、辛くない？

―閲覧者…凧／二〇二六年 一月一日―

「明けまして！ おめでとう!!」

「おめでとう」

除夜の鐘を鳴らす寺を映していたテレビのデジタル時計が、午前〇時〇分に切り替わる。二〇二六年が始まった。

年越しそばは食べた。ビールも飲んだ。後は寝るだけ、

――と、思うじゃん？

凧はおもむろに立ち上がると、鈴木を見下ろしてにかつと笑い、

「それじゃ行こっか、初詣」

「今から!？」

夜の底に並ぶ提灯が、新たな年を祝っていた。

外出するからにはと髪をセットしようとする鈴木へコートを押しつけて、吹き荒ぶ風に煽られて、寒い寒い、なんでカイロを持ってこなかったなどと言い合いながら歩

くこと、十分。地域の氏神を祀る神社の参道は、深夜ながら参拝客でそれなりに賑わっていた。

賽銭箱には、奮発して一万円。頭が膝につく勢いで二拝、境内中に轟かんばかりにばあんぱあん²と二拍手、そして。

——伊波宏正が無事に帰ってきますように。

ただそれだけを願い、もう一度頭を下げきって一拝。全身全霊で祈願する風の傍で、鈴木は静かに手を合わせていた。

未だ参拝客が並ぶ階段の端を下りつつ、風は鈴木に訊ねてみる。

「鈴木くんは何をお願いしたの？」

「緑央×大月氏コラボ企画、新規フォロワー数達成……」

「切実すぎる」

癖は強いが優しい人柄と家庭的で簡単おいしいレシピが人気で、SNSでよくバズる料理研究家とのコラボ企画は、風も大いに関係があった。人混みを離れたあたりを見計らって、小声で問う。

「KPI、どれくらいだっけ」

「五万だ」

「今いくつ？」

「……三万五千……」

「大月先生と神様とベジ乃進の力を信じろ……！」

正に神頼みをする他ない状況の販促部主任を励ましつつ、出口へ向かう。

提灯の光を背に受けて鳥居を潜れば、現世へ戻ってきた気がする。静謐な夜の住宅街へ向けかけた足を、ふと転換してみる。

「そっちでいいのか？」

行きとは違うルートに戸惑う鈴木に、

「ちょっと遠回りしていい？」

軽く笑って、頼む。もう少しだけ、この時間続けるために。

神社からほどなく、川沿いの道へ出る。黒い水面が、街灯の光を密やかに映し出していた。その流れを辿りながら、

「鈴木くん」

あえて軽い調子で聞いてみる。

「何度も聞いて悪いけどさ、なんでここまで親身になってくれたの。見返りもないのに」

「……だから、恩を売るためと言っただろう」

「ええ？ 本当にい？」

「何なんだこいつ鬱陶しい……」

にやつきしながら至近距離から見上げれば、露骨に眉を顰められた。それでも怯まず、風は食い下がる。

「もうすぐ仕事始めじゃん。その前に、ちゃんと聞いておきたいんだ」

鈴木との突貫同居生活は、年末年始の休暇内という約束だった。宏正も、間もなく帰ってくる。こんな風に腹を割って話せるかもしれない時間は、多くは残されていないなかつた。

革靴とスニーカー、二重の靴音だけが、夜道に響く。やがて、観念したかのように鈴木が吐いた溜息が、白く染まった。

「……見返りなんて、初めから求めてない。そうしたいからしただけだ」

——だよな。わかるよ。俺もそうだから。

胸がぎしりと軋む。鏡を覗き込むかのように鈴木を見上げて、

「しんどくない？　そういうの」

鈴木の口元が、引き結ぶように動いた。僅かに開いて、また閉じる。眉間に深い皺を刻みながら、それでも鈴木は再び口を開き、

「俺は、……ゲイなんだ」

「ふんふん」

「そんな軽く流すところだったか!？」

「え、だって誰が誰を好きになろうが自由じゃん。迷惑かけるとか無理矢理とかは駄目だけどき」

「わかってるじゃないか」

口の端に皮肉を滲ませて、鈴木は続ける。

「職場の男性に声なんかかけたら、コンプラ窓口に一発で通報されるに決まっている。特にお前はべらべらとよく喋るし、翌日には全社員に知られかねないしな」

「喋らないよ、いくら俺でも！　守秘義務は厳守するってば！」

よく回る口は武器でもあるが、だからといって無作為に振り回すつもりはない。必死に言い返す風、鈴木は自嘲が滲む笑みを向けた。

「成り行きとはいえ、お前の家まで押しかけたんだ。冷静に振り返ってみたら、コンプラ窓口どころか――○番案件だったな」

それはそう。風は真顔でうんうんと頷いた。けれど、社会的地位はもちろん、人生の全てを擲つ覚悟で鈴木がドアをこじ開けてくれたおかげで、今の風が在る。それだけは一生忘れないように、胸の奥へ大切にしまい込む。

鈴木は息をついて、前を向いた。

「春山が生きていることが、十分な見返りだ。だから、辛くはない。……こんな回答で満足か」

自嘲の代わりにいつもの不機嫌そうな顔を向けられて、風は頷いた。

「うん。……ありがとう、本当に」

口角を綻ばせて、鈴木の背中をぽんと叩く。

「鈴木くんにも、必ずいい人見つかるよ。シゴデキだし料理上手だし眼鏡似合ってるし、結構強引なところはあるけど何だかんだ優しいし、いいやつだもん。あとはその、

喋り方かな？　ちょっとだけウエメセ気味だから、そこ下方修正したらいけるいける」

「そういうところが、……っ……何なんだ本当に……!!」

笑顔でサムズアップすれば、鈴木は赤面とも苦渋とも言い難い顔を顰めた。そんな有様を見せられてしまえば、ついつい悪戯心が芽生えてしまう。風は悪い笑みを浮かべるや、更に鈴木へ擦り寄り、

「ついでに聞くけど、いつから俺を好きになったの〜？」

「うるっさい黙れ馬鹿あっち行け」

「いいじゃん、おーしーえーてーよー」

「ああもう、しつこい！　……なんで俺はこんな奴に……!!」

クソガキ呼ばわりされた仕返しも兼ねて、図々しく絡みつく。鈴木は苦み走った顔で煩悶を溢し、

「俺を見てない奴になんか、絶対に教えない」

意固地に言い捨てて、そっぽを向いてしまう。普段は律儀に整えているのに、急な外出でばさついたままの後ろ頭を、よしよしと撫でてやりたい。そう思ってしまった胸の片隅で悲しげな顔をしている宏正がよぎり、心が軋む。

「お前こそ、何故伊波さんに本心を伝えてこなかったんだ。長い付き合いなんだ、機会はあっただろう」

今度はこちらが追求される番だった。防御に回った風は作り慣れた笑みを浮かべて、
「まあ、そこはほら、ね？ ……親友だから、つてことで」

「今更親友なんて言葉で誤魔化せると思うなよ」

鈴木に演技は通じない。何より、誠実じゃない。観念した風は、刺されるような痛みをこらえながら仮面を外す。

「……宏正にはさ。幸せになってほしいんだよ」

道の先に浮かぶ青白い月を見上げながら、ぽつりと呟く。

「あいつは強くて格好良くて真面目で優しいから、きつといい人と出会えるよ。で、いいお父さんやお爺ちゃんになって、素敵な奥さんや宏正にそっくりな子どもや、ちっちゃくて可愛い孫たちに囲まれて、……一生笑っててほしい。そこに俺が入ったら、台無しじゃん」

「同感だ」

隣から降る短い応えに、はっとする。

鈴木はゲイだと言っていた。そういう人間に『家族』を説いてしまうことの意味に、遅まきながら気づく。

「毎回でごめんだけど、……今回もごめん」

「そろそろ学習しろ、ノンデリクソバカ小僧め」

「ごもっともでございます……」

返す言葉もなく、風は俯いた。

「……なんか、似たもの同士だね、俺たち」

「……かもな」

言葉少ない返しを最後に、会話は途切れた。しばらくは風も口を噤む。

叶わない想いをひた隠す。叶わなくとも身を捧げる。図らずも同じ選択肢を選んだ男たちが並んで家路を辿るうち、

「……春山」

鈴木の真剣さを帯びた声が、足音に被さる。

「理解しているかどうかは知らないが、伊波さんが戻れない可能性もある。覚悟しておけよ」

「いやいや、それはないって。勇者は魔王を倒すのが定番じゃん」

「人間が作った物語ならな」

鋭い舌鋒に、風の楽観は呆気なく斬り伏せられる。

「あの世界は、人間と敵対勢力の間で協定が結ばれている。ということとは、パワーバランスが拮抗しているんだ。結果がどちらに転んでもおかしくない。まして伊波さんは本来発動すべき技能が未だ不明だろう。言いたくはないが、不利な状況下にあるのは間違いない」

「……それは、……そう…………だけどき……」

反論を試みる口が動きづらいのは、風自身も薄々は察していたせいだ。宏正の帰還が確実とは言いきれない、だからこそ、一万円札と最敬礼をもって神頼みをしたのだから。

伏目がちになる風に、鈴木は淡々と訊ねた。

「伊波さんが無事に帰ってきたら、どうする気だ」

「そりゃ盛大に祝うよ、祝賀会だよ」

「本当に、それだけでいいのか」

革靴の底が、ぎっと鳴った。路上で足を止めて、鈴木は風を見据えた。

「伊波さんが春山をどう思っているかは、わからない。だが、何も伝えないまま、もしまた伊波さんと離れてもいいのか？」

「でも、そうしたら鈴木くんが」

——あまりにも報われないじゃん。

言えなかった。受け止められない想いへの同情など自分勝手に傲慢なだけだと、ノンデリ頭でも理解できた。

風の葛藤を見越したかのように、鈴木はふっと笑い、

「伊波さんが春山を受け入れたら、俺はただの同期に戻る。その代わり、お前にはコラボフェアの売り場を確保してもらうからな。主要チェーン、全てだ」

すぐに仕事の話へ転換してくれる心遣いに、目の奥が熱くなる。風はぐいと目を擦って、精一杯の笑みを浮かべる。

「了解。鈴木くんのためなら、日本全国どこへだって飛んでいくよ。我らが緑央×大月先生コラボミールキットの棚は、この天才営業マン春山風にお任せあれ！」

「お前それ高原課長の前で言えるか？」

「すいませんした調子乗って!!」

姿なき上司に手を合わせて詫びると、何だか自分でも妙におかしくなって、吹き出してしまふ。鈴木も口角を緩めて、含み笑っている。月に照らされ路上に伸びた二人の影が、揺れていた。

あの角を曲がれば、マンションが見えてくる。もっと遠ければ良かったのにと、風は思った。

— 閲覧者… 凧／二〇二六年 一月二日 —

【決闘場へ辿り着いた】

「始まったぞ、春山！」

「待って待って今行くから！」

ログが投稿されたのは、昼食を終えて間もない頃だった。

泡だらけの食器をシンクへ投げ出し手を濯ぐや否や、凧は一目散に鈴木とスマホが待つロビーへ駆けつけた。鈴木がテーブルに置いてくれたスマホの前に正座して、画面を覗き込む。

端正な顔や旅装束は砂埃などで汚れていたが、特に怪我は見当たらず、凧はほっと息をついた。表情も以前の荒んだ色は薄れ、召集の連絡を受けた時のような精悍さを取り戻している。

——これなら、いける。かも。

凧はぐくりと息を呑み下した。

「着いたからって、すぐに決戦が始まるわけじゃないだろう。しばらくは様子を見るぞ」

全身が緊張で強張っている風を見かねたか、鈴木が声をかけてくる。大きく頷いて、風は再びスマホを注視した。

【先方も既に到着している。開始時刻は明日の五陽】

「五陽って、時間のことだね。こっち時間だと何時頃？」

「わからん。交代で見張っていた方がいいな」

【決戦場の広さは、武道館の大武道場くらいか。魔法剣である程度の衝撃波は出せるようになったが、最長経路まで届かないかもしれない。周りに観客席のようなものもあって、決戦の際は余波に巻き込まれないよう壁が張られるらしい】

「予選見に行ったから、何となく距離感はわかる。あの時の宏正、マツツツジでかつ

こよくてき!? 小手、それから面にこう、ばっしいいつ、て!!」

「惚気は後にしろ……!」

【人間側の控え室へ迎えられる。久しぶりの広い風呂に、脚を伸ばして入る。温かい湯に体を沈めて目を閉じると、何もかもが夢だったように思えてくる】

「うん、うん、……もうすぐだから」

「……………」

【別途届けられていた正装と鎧の試着をする。この世界の人たちの人生、全てが俺にかかっている。……負けられない】

「そもそもさあ、そっからしておかしくない!? 宏正なんも関係ねえじゃん、そっちのぶたぶたに! それはそうと。パーフェクト勇者スタイル宏正、かっこよすぎない? 見てみこれ、騎士? つか王子? すごいキラキラしてんだけど! なんでスクシ

「禁止なんだよ保存させろよ！ いやもうそういうのいいから、今のうちに逃げちゃえよ！　こんなよその世界のあれこれまで宏正が背負う理由、何もないだろ！　って帰還の何ちゃらがあるから、結局勝たないとダメってことかぁー汚ったねえ!!」

「耳が。痛い」

次々と投稿されるログに記載された宏正の一挙一動に、一喜一憂してしまう。だが、鈴木がうんざりするほど饒舌に喋り倒す耳の奥では、

『伊波さんが戻れない可能性もある』

昨日の言葉が、風に囁かれ続けていた。

ゲームなら、多彩な攻撃魔法がある。必殺技もある。回復魔法もアイテムもある。仲間もいる。攻略本やサイトもあるし、いざとなればセーブ＆ロードを使えばいい。

だが、宏正にあるのは、たった二つの技能と充填される魔力だけ。グレンとかいう従者もフィールドには立つようだが立場はセコンドに近く、共に戦えるわけではない。

——もう一度、宏正が死んじやったら。

電車の床に血まみれで倒れていた姿が、脳裏を掠める。それだけで、鼓動は乱れて息が苦しくなる。

次の投稿では、銀の杯や燭台、洒落た盛りつけの料理が並んだ長いテーブルに招かれた正装の宏正とグレンが夕食を取っている様子が映っている。ナイフやフォークを器用に使いながら主催者と歓談する宏正は堂々としていて、『勇者』という肩書きに相応しい物腰だった、だが。

——あのさ。本当は、どう思ってるんだ。

画面の宏正に、触れてみる。ガラスフィルムに阻まれた親友の心を知る術は、ない。瞬きを忘れた目が、乾いていく。次の投稿はまだかと画面を食い入るように見つめるうち、

「皿洗いが途中だっただろう」

低い声音が、現実へ引き戻してくる。

「今日の当番はお前だからな。ログにかこつけてサボるんじゃない」

まだログの投稿は終わっていないのに、キッチンへ戻るよう無慈悲に促される。が、

「了解、鈴木軍曹」

むしろほっと息をついて、風は立つ。

「やっぱシゴデキ主任はマネージメントも上手だね。でも新卒にこの言い方したらパ

ワハラだからさ、気をつけた方がいいよ」

「わかったわかった俺が至らなかった反省する、だからさっさと行ってこい」

手を振って追い払われるが、凧は口元を綻ばせて、泡だらけのまま放置された食器を手に取った。

こちらがいくら気を揉んだところで、宏正の助けになれるわけでもないし、勝敗の行方もわからない。であれば、続報が届くまでは何かしら作業していた方が、多少は気が楽になる。

——やっぱり、鈴木くんはいいやつだ。

心の中で呟いて、凧は残りの食器を洗っていく。

最後の食器を濯いで水切りへ入れて、濡れた手をタオルで拭いた。ついでにコーヒーでも淹れようとインスタントの瓶へ手を伸ばしつつ、

「コーヒー淹れるけど、鈴木くんも飲」

「なっ」

ごっこん、と瓶が倒れた。ローテーブルから聞こえた声は、明らかに尋常ではない響きを帯びていた。

ゆらりと振り向けば、顔面蒼白の鈴木がスマホと対峙していた。

口元の笑みが、消えていく。無色の顔で足早にローテーブルへ近づけば、鈴木は血相を変えてスマホを握り、両手で胸に押しつける。

「……これだけは、駄目だ」

いいから。それさえも口にすることなく手を伸ばし、

「やめろ、見るな、春山っ!!」

抵抗する鈴木にのしかかるようにして、スマホを強引にもぎ取った。表示された画面を、空っぽの目でなぞる。

【軍人や歴史家を交えた戦略会議後、グレンと最後の鍛錬を行う。魔力の切り替えに問題はない】

【グレンには、……悪いことをしたと思っている】

【帰り際、司教に俺だけ呼び止められた。勝利を祈願する儀式があるらしい。御祈祷

のようなものだろうか」

【儀式にあたつて、秘薬を飲む。妙に甘く、飲んだ直後から胸が熱くなる】

【儀式の場がある地下へ連れて行かれる。魔法陣が描かれた床。壁の中央には空いている穴から、鎖と手錠らしきものがついた台がせり出している。これは一体何か、訊ねようとしたら、体から、力、ぬけて、……あつい、あれ、……やく、……ぶ、つ……】

【ふくを脱がさ、ぜんぶ……からだ、だいに、穴のむこうから足、ひっぱられ、あしくび、もちあげられて、てくびも、てじょう、うごけない、あつい、あつい、いれたい、いれられたい、なんだこれ、へんだ】

【なにか、じゅもん、となえて……かべのむこうも、だれか、はなしてる、たくさん】

【まりよく、そそがれる、おれじゃかてないから、でも、そのやくめは、グレンだけ、はずじゃ】

【いたい、なにか、ねじこまれてる、ぬいて、いたい、ぬいてくれ】

【おく、ぐりぐりされて、きもちい、またイク、いやなのに、イクっ】

【おれは、みなをすくいたただけなのに、どうして、いつも】

床に描かれた魔法陣が青白い光を放っている。その中心では、壁から伸びた左右の足錠によって固定された両脚が、剥き出しの尻を起点にVの字を描いている。神に捧げる生贄のように。

順番に並んでいる男たちの髪は青、緑、黄など、おしなべて派手な色だった。グレンと同様に。吊り上げられた脚の間に立った男が、宏正に何をしているか。ログを読まずとも、顔を紅潮させながらも怯えた目つきで台に横たえられた宏正の姿を見れば、

嫌でもわかってしまう。

「……なんでだよ」

やっとのことで声を絞り出す。目を伏せる鈴木を他所に、

「なんでこんなことするんだよ!? 聞いてんのかクソ野郎!!」

声を張り上げて怒鳴りつけるが、画像の中の男たちにも、司教にも届かない。

「……恐らくは……技能不足を補うために……」

「んなことわかってるよ!!」

言いづらそうに推論を述べる鈴木を一喝し、

「戦争だか何だか知らないけどさあ、やりたい奴らだけで勝手にやってろよ! ミリも関係ないだろ宏正は! それをお前らの都合で巻き込んで、勝ったら戻れるなんて人の足元見て協力させやがって、最後はこれかよ! こんな奴らを守ってやる必要あるか!？」

「春山……」

据わった目で怒りを叫ぶ風に、鈴木も口を挟めずにいた、しかし。

ピコン、間を置かず次のログが投稿される。

【なぎが、たすけにきてくれた】

「……へ？」

思わず鈴木へ目を向ける。スマホを見せると、鈴木も訝しげに眉根を寄せて、首を横に振る。

【なぎ、なぎ、あいたかった。ずっと、会いたかった】

「……俺もだよ。会いたいよ、宏正……でも」

【なぎが、おれにキスしてくれた。うれしい、もっと、したい……してほしい】

【なぎの手が、おれのからだをなでて、それだけで、しあわせ】

「どういふこと……？ 俺はここにゐるのに」

「……薬物による幻覚じゃないか」

困惑を露わにする風、鈴木は苦渋に満ちた顔で声を返す。

もう一度、ログの画像をよく見てみる。風の名が出た後も、宏正の状態は変わらない。だが、精悍な顔はとろりと蕩けて、歓喜に満ち溢れているように見えてしまう。

【なぎが……入ってくる……いたい、けどきもちいい、なぎ、なぎ、なぎ】

【あいしてる】

「あ……」

か細い声が、喉から漏れる。

——宏正が。愛してゐる。俺を。俺のことを。

だが、歓びが胸を満たしたのも束の間、

【これはゆめだ　きっとそうだ　だって】

【なぎは　じょせいが　すぎだから】

「……何それ」

震える声で呟くのが、精一杯だった。

「俺が女の人が好きって、俺は、俺が好きなのは宏正だけだよ！　なんでそんな誤解」言葉が止まった。どくん、どくんと心臓が跳ね続けている。――もしかして。

『宏正！　俺さ、彼女できちゃった』

高校の文化祭の時だった。クラスの出し物でメイドのコスプレをしている時に、同じ放送委員会の女子から告白された。

優しい子だった。嫌いじゃなかった。初めての告白、それも文化祭で。青春の王道シチュエーションに浮かれて、首を縦に振った。

それを告げると、宏正は驚いたように目を見張って。

『……おめでどう、風』

と、温かい笑顔で祝福してくれた。

気づかなかった。その祝福が、何を犠牲にしていたのかを。

知らなかった。友情というラベルを貼り続けていたその想いの、本当の名を。

破局は、遠からず訪れた。冷たい態度であしらったわけではないが、事あるごとに宏正、宏正と言い続けていれば、彼女との距離が縮まるはずもない。手厳しく振られて、俺の何が悪かったんだろうと泣き言を言いながら相談した相手が宏正なのだから、どうしようもなかった。挙句、大学でも同じことを繰り返して、やっと宏正へ向ける想いの名を知った。

「ごめん……」

安請け合いで傷つけた女性たち、そして宏正へ、風は詫げる。

「全部、俺のせいだ……宏正が好きだって、気づいて、言えば良かったんだ……」

——宏正の『家族』は？

「普通の『家族』にはなれないかもだけど、俺が必ず幸せにする……宏正の父さん母さんにも頭下げる」

——それだけ覚悟決まってるなら、なんで言わなかった？

「……怖かった。二度と宏正と親友に戻れないかもって考えたら、どうしても言えなかった……俺が自分のことしか考えてなかったから、宏正は……!」

ぼろ、と涙がスマホに落ちた。最後の最後に尊厳を打ち砕かれながら夢に逃避する宏正の笑みが、水滴に滲む。

「ごめん、宏正……! 全部、全部俺のせいだ……俺が勇気出して宏正に自分の気持ちを伝えてたら、あの日だって何かが変わってた! 宏正だって死ななくて済んだ!!」

「それは違う!!」

不意打ちで肩を掴まれ、横へ向けられる。

鈴木が、風を見据えていた。鋭く真摯な眼差しを風へ突きつけ、

「全てが春山の責任なわけないだろう! もちろん伊波さんにも非はない! どう足掻いたって変わらない巡り合わせだってある!」

「黙れよ!! 何にも知らないくせに!!」

「じゃあ聞くが、俺の両親が離婚したのは、俺が出来なかったからか!? 医大に二浪したのも、俺が出来損ないだったからか!? 毎日深夜まで勉強した、A判定も出していた、あれ以上どう努力すれば良かったんだ!? 教えろ、春山!!」

見たことがない鈴木の形相に、瞬時怯む。

鈴木と風のケースは違う、反論しようと思えばできた。だが、鈴木が風に突きつけてきたのは、そういう話ではない。

——そうやって自分を責めてきたんだ、鈴木くんも。

唇を、ぎゅっと噛みしめる。だが、涙は溢れてくるし、込み上げる鳴咽も防ぎきれない。

「……春山は、悪くない」

静かに、だが力強く告げると、鈴木は風の右手を取って、両手で包むように握った。鈴木の体温が、掌から伝わってくる。

——そんなに優しくしなくていいのに。

それでも鈴木の手が温かくて、温かすぎて、風はしゃくり上げ続けた。

数時間後、ピコンと通知音が鳴った。

【全部、終わった】

その一言を最後に、投稿は途絶えた。

終章

スマホは引き出しの奥に

— 閲覧者… 風／二〇二六年 三月十四日 —

がらごろとスーツケースのキャスターが、週末のマンションの廊下を賑やかす。ドアに鍵を刺して回して、

「疲っっっっかれたぁ……!!」

玄関のドアを閉めるなり、風は懐かしの我が家へ叫んだ。

『全部終わった』。その一言を最後に、宏正の投稿は完全に途絶えた。本当に一人で大丈夫かと何度も念を押しつつ、鈴木は最後の休暇の日に自宅へ戻って行った。

コラボフェアにおけるフォロー数は、無事目標数を達成した。この盛り上がり維持しながら、販売に向けて全国の棚を確保する。鈴木との約束を守るべく、この二ヶ月、風は文字どおり全国を飛び回った。苦勞の甲斐あって、結果は当然大金星。来週出社したら。鈴木にドヤ顔で報告してやるつもりだった。あと、メシも奢ってもらう。

一店一店を巡って交渉するのはやり甲斐があるが、流石に疲れた。スーツケースの整理は明日に回して、今日は少し休んだら風呂に入ってベッドで休みたい。靴を脱い

で部屋へ上がって、まずはベジミクスでもと冷蔵庫を開けた、瞬間。

ブルルルル、と電話の呼び出し音が鳴った。

「はいはいはいはいはいーい」

冷蔵庫を閉めてスラックスのポケットからスマホを取り出すが、何の通知も表示されていない。おかしいなと首を傾げるも、呼び出し音は鳴り続けている。となれば、まさか、

「……え、こっち……!?!」

もしかして、ともう一つのスマホを胸ポケットから引っ張り出す。震える手で握ったスマホを覗き込めば、発信者は、

「宏正!?!」

二ヶ月間、一切の音沙汰がなかったスマホに表示されていたのは、宏正の名だった。それも、SNSの更新通知ではなく、電話で。

——え、待って待ってどうということ？ 新手の詐欺？

爆発しそうな心臓を押さえつけながら、緑の通話ボタンを押す。

「……もしもし」

声が上擦る。ごくりと喉を鳴らした、瞬間。

『凧!! 本当に繋がったんだな!』

「宏正!!」

聞き違えるわけがない。電話口から聞こえてきたのは、凧の唯一無二にして最愛の親友の声だった。

であれば、理屈なんてどうだっていい。今はただスマホを耳へ押し当て、募った想いをひたすら言葉に乗せていく。

「無事か!? 怪我してないか!? またひどい目に遭ってないよな!」

『……もしかして、今までも俺の声が届いていたのか……!?』

「来てた来てた! 全部終わったってところで途切れちゃったんだけど、良かった生きてて……あっそうだ魔王は!? どうなったんだ!? 帰還何ちゃらで帰れるんじゃないのか!」

『……そこまで伝わっていたか……』

矢継ぎ早に質問を投げ続ければ、応える声に苦渋が滲む。

『あれは……元の世界に帰る方法じゃなかったんだ』

「え」

言葉を、失う。

「てことは……帰って、……これない……？」

『そうなんだ。……すまない、風』

否定してほしかった。なのに重い口調の肯定が、ガラスにも似た希望を粉々に碎いてしまう。

薄々は、気づいていた。魔王を倒した、儀式を受ける、帰る。こちらでは二ヶ月も経つのに、一向に宏正が現れない時点で話が違うからだ。けれど、

「平気、……なのか？」

『ん？』

「あんなところに残されて、……宏正だけで」

あの世界は、宏正独りに『勇者』という役割を課して、裏切って、利用した。帰りを待っていたのは、会いたかったからだじゃない。何の罪もないのに地獄へ墮とされた親友が、正しく救われてほしかったからだ。

沈黙が、聞こえる。風にも話せない苦悩が籠った静寂が、耳を刺す。

宏正を助けるためなら、なんでもする。かつて悪夢で誓った言葉が、よぎる。今がその時なのだとしたら。

それを選べば、宏正以外の全てを捨てることになる。家族、友人、そして鈴木。大切な人たちの顔を思い浮かべ、それでもいいと風は乾いた口を開き、

「帰れないなら、俺がそっちへ」

『大丈夫だ』

芯の通った声が、昏い覚悟を決めた魂に響いた。

『俺は一人じゃないよ、風』

宏正の笑顔が、まぎまぎと蘇った。目元を綻ばせた、あの優しい笑顔が。

『魔王たちも俺と同じ境遇だと知って、協力しているんだ。今は俺のペアと、魔王とその副官、四人で行動している。もっとも、色々あって逃げたせいで、国家反逆罪で全員指名手配されてるけど』

「交番の掲示板でよく見るやつじゃん」

氏名と罪状がセットになった写真四人分が並ぶポスターを、脳内に掲示してしまう。が、状況の割に宏正の声に悲壮感はない。

『腰を落ち着けられる場所が見つかって、俺も第三の技能を使いこなせるようになって、……やっと、風と話せるようになったんだ。元気か?』

『元気だよ! 今日だって出張行ってきたし、全国の棚制覇してきたし……!』

『はは、やっぱり風はすごいな。天才だ』

『そんなこと……あるけど……』

何とか普段の明るい口調を取り繕おうとするが、どうにも調子が出ない。伝えたいことだけが、上手く形になってくれずにいる。

一方、宏正はよく響く穏やかな声を一段落とすと、

『日本刀展、……行けなくてすまなかった』

「いいんだよ、んなこと! だって、あれは、……宏正が……」

——死んだ、原因だ。俺があんな約束さえしなれば。

そんなことを当人へ向かって言えるわけもなく、声が震えてしまう。けれど、

『風』

優しい声音が、荒れ狂う波を鎮めた。

『覚えてるかな。居酒屋で、風が俺をヒーローって呼んでくれたこと』

「覚えてるよ！ ……忘れるわけじゃないじゃん」

——ごめん。俺があんなこと言ったせいで、宏正を追い込んで、本当にごめん。戦慄く口を開いて詫びようとした、刹那。

『あの言葉のおかげで、俺は最後の最後で自分を取り戻せた。なりたかった自分を、思い出せたんだ』

喉が、ぎゅうと詰まる。だってあれは宏正を縛って殺した呪いの言葉で、そのせいで宏正は酷い目に遭った、なのに。

『ありがとう、風』

どこまでも優しい感謝の言葉が耳に触れた瞬間、風は悟った。

あの台詞が呪っていたのは、風自身だった。宏正の死や苦境に対して何の力もない自分を許せなくて、どうしたって許せなくて、自ら作り上げた罪で自分を縛っていた。その呪いを、風の勇者でアーマーマナイトでヒーローが、たった一言で解いてくれた。

止め処なく涙が溢れて、齒を食いしぼる。ありがとうと言いたいのはこちらの方なのに、一言でも声を出したら嗚咽が止まりそうになかった。

『……すまない、そろそろ最後の魔力が切れるみたいだ』

真剣な声音が、永遠の別れが近づいていることを告げていた。そういうことなら一秒でも惜しくて、凧は目をごしごし擦る。

『どうか元気で、……幸せでいてくれ』

「宏正こそ！ そっちでも絶対幸せになれよ！ おじさんおばさんにも夢で会えた、宏正元氣だったって伝えとくから！ あと、いくら忙しくてもちゃんと休めよ、無理すんな！ ほんとと真面目なんだから、宏正は」

『相変わらず、凧は過保護だな』

互いへ軽口を叩きながら、どちらからともなく笑い合う。失われた幸福が、この瞬間だけは蘇る。

『凧。俺の親友でいてくれて、ありがとう。大好きだ』

最後に伝えてくれた言葉は、どこまでも温かかった。目の奥が痛むが、涙を流すのは後でいい。大切な言葉を返すために、凧は口を開く。

「俺の方こそ、……ずっと隣にいてくれて、ありがとう。俺の大大大大親友」

そして、大きく息を吸って。

「……愛してる」

宏正が息を呑んだ。何か言おうとした気配がした、途端。

通話終了の音が、鼓膜に響いた。

平坦な電子音を鳴らし続けるスマホを握りしめたまま、凧は立ち尽くしていた。しばらくそうしていた後、もう一度冷蔵庫を開けて、ベジミックスのパックにストローを刺し、ごくごくと飲み干す。空の容器をゴミ箱へ捨てて、着替えもせず寝室へ直行し、ベッドへ身を投げる。

スマホを持ち上げて、ホーム画面を開く。宏正の冒険と悪夢が記録されたあのS Nのアイコンは、影も形もなかった。

——本当に、終わりなんだな。

視界が、またもや潤む。厚ぼったい目尻から、つうと涙が伝い落ちる。

「宏正……」

大切な名を呼びながら、凧は独り声を張り上げて泣いた。けれど、頬を濡らす涙も胸の内も仄かに温かかったことを、凧は知っていた。

― 風／二〇二六年 三月十五日 ―

「どうぞ」

こと、とローテーブルに置いたマグカップから、白い湯気と香ばしい香りがほんのりと立ち上った。

「ああ、いただきます」

特売のインスタントだから、口に合うかはわからない。けれど、一口飲んだ鈴木は微かに笑った。つられて綻んだ口元に寄せたマグカップを傾け、風もコーヒーを飲み始めた。

「良かったな、伊波さんと話せて」

「……うん」

穏やかな声音に、風は柔らかに頷く。

あの後泣いて、一晩中泣いて、やっと涙が枯れたのは今朝方だった。

事の顛末を伝えようと鈴木へ電話したら、タクシーを飛ばして来てくれた。鈴木だって大概過保護だと、風は思う。

「言いたかったことは全部言えたよ。だから、……もう、大丈夫」

まだ目は赤く腫れていたけれど、顔を上げて鈴木を見る。

「鈴木くん」

コーヒーを飲む手を止めた鈴木と、目が合う。

「俺はさ。宏正が警察官になってみんなを守ってる姿を、心の底からカッコいいって、ヒーローだって思ってた。それはそれとして、鈴木くんもずっと俺のそばにいてくれて、厳しい時もあったけど、俺を引っ張って立ち直らせて、守ってくれた。だから、俺にとっては鈴木くんもヒーローだったんだな、って」

「春山……」

眼鏡の奥の目を見開いた鈴木の手を、ぎゅっと握る。

「散々待たせて悪いけど、あと一年欲しい。まだ気持ちがちやついてるからさ、ちゃんと整理して、鈴木くんだけを見られるようになりたいんだ」

仕事もプライベートも、同じだ。相手の目を見て、誠心誠意を差し出して、

「だから、それまで待って……わぶっ!!」

ローテーブルががたんと揺れて、コーヒーに小波が立った。息が苦しいほど抱きし

められて、一瞬面食らう。けれど、不器用な腕の強さも胸の温もりも首筋から漂う清涼感ある香りさえも愛おしくて、風はゆっくり目を閉じた。静かに嗚咽する背中へ手を回して、優しく撫でさする。

街路樹の蕾が、そろそろ綻びようとしている。風いだ春は、間もなく訪れる。

―風／二〇二七年 二月二十六日―

「これは警察学校時代、坊主頭も初々しくて可愛いだろ。で、交番勤務したての新任時代がこれ。肩に力入っちゃってるけど、それも真面目なところが出て俺は好き。でもって完成版がこれな！メインではきりっとしてるけど、道案内してる風のこっちだと、爽やか優しいかつこいい町のお巡りさんそのものじゃん？ さっすが俺のレジェンド大親友！」

「俺はどういう反応をしたらいいんだ？」

自宅のソファーに並んで座りながら、ラミネート加工済み警察官募集パンフレットを収めたファイルを見せつけ、風は熱量たっぷりに解説する。一方、鈴木は眼鏡の奥の目を引き攣らせながら、精一杯の抵抗を試みていた。

「……俺だって、先月社内報に載ったんだが……」

風から目を逸らして、鈴木は悔しさを滲ませながらぼそりと呟く。

それも、想定内。拗ねる鈴木の顔を覗き込みながら、風はにっと笑い、

「かーらーのおー？」

ぺらりとファイルを捲った先には、服装も態度も髪型も完璧な販促促進部主任が、微かに笑っている写真。それと、昨年主導していたコラボ企画の成功を讃えた社内表彰の記事が印刷されたページが収められていた。もちろん、ラミネート加工もしっかり施している。

「はあ!? な!? え!? わ、わざわざ作ったのか!? これを!」

嬉しいのか恥ずかしいのか照れているのか、顔を真っ赤にして狼狽える鈴木に吹き出すのを堪えつつ、

「そうだよ。おめでとう、鈴木くん」

当初は伸び悩むかと思われていた企画を成功させるべく、鈴木が社内外を日夜奔走していた姿は、凧もよく知っていた。スマートな外見とは裏腹の泥臭い努力が報われたことへの心からの祝福を述べると、

「俺だけの功績じゃない。……他人に……春山に頼れたおかげだ」

伶俐な吊り目が、朗らかな笑みを湛えた。いつも眉間に皺を寄せていたあの鈴木が、笑っている。その姿を間近で眺めるうち、胸の奥がじわりと温かくなってくる。

ファイルを閉じて、凧はスマホのカレンダーを表示する。

「そろそろ約束の日が近いだろ。その辺りに出かけようよ。何なら一泊でもいいしき」

「わかった……五つ星ホテル最上階スイートだな……!!」

「いきなり札束バトル始めんなよ」

覚悟を決めた顔で言われても、そういうシチュエーションは求めていない。旅行サ
イトを開いて、地域を指定して、

「この辺とかき、どう？」

列挙されたホテルや旅館が冠する地名を見せれば、鈴木は目を見開いた。

「……いいのか、この場所で」

「うん」

戸惑う鈴木に、迷わず頷く。

「ここで返事させて。湊くん」

あの日鈴木に、いや、鈴木湊に連れて行かれた海の写真を指さして、風は心の底か
ら微笑んだ。

柔らかな光差し込むリビングの壁際、キャビネットの上には数枚の写真が飾られている。

写真に映るは、小学生、中学生、高校生、成人式の凧と宏正。その隣には、表彰式後のパーティーでビールが入ったグラスを片手に笑い合う凧と湊が並んでいた。

写真の下、キャビネット上段。小さな引き出しの奥に一台のスマホがしまわれていた。

もう光を放つことはないけれど、密かに、大切に。

「クリアデータをセーブしますか？」

▶ はい

いいえ